

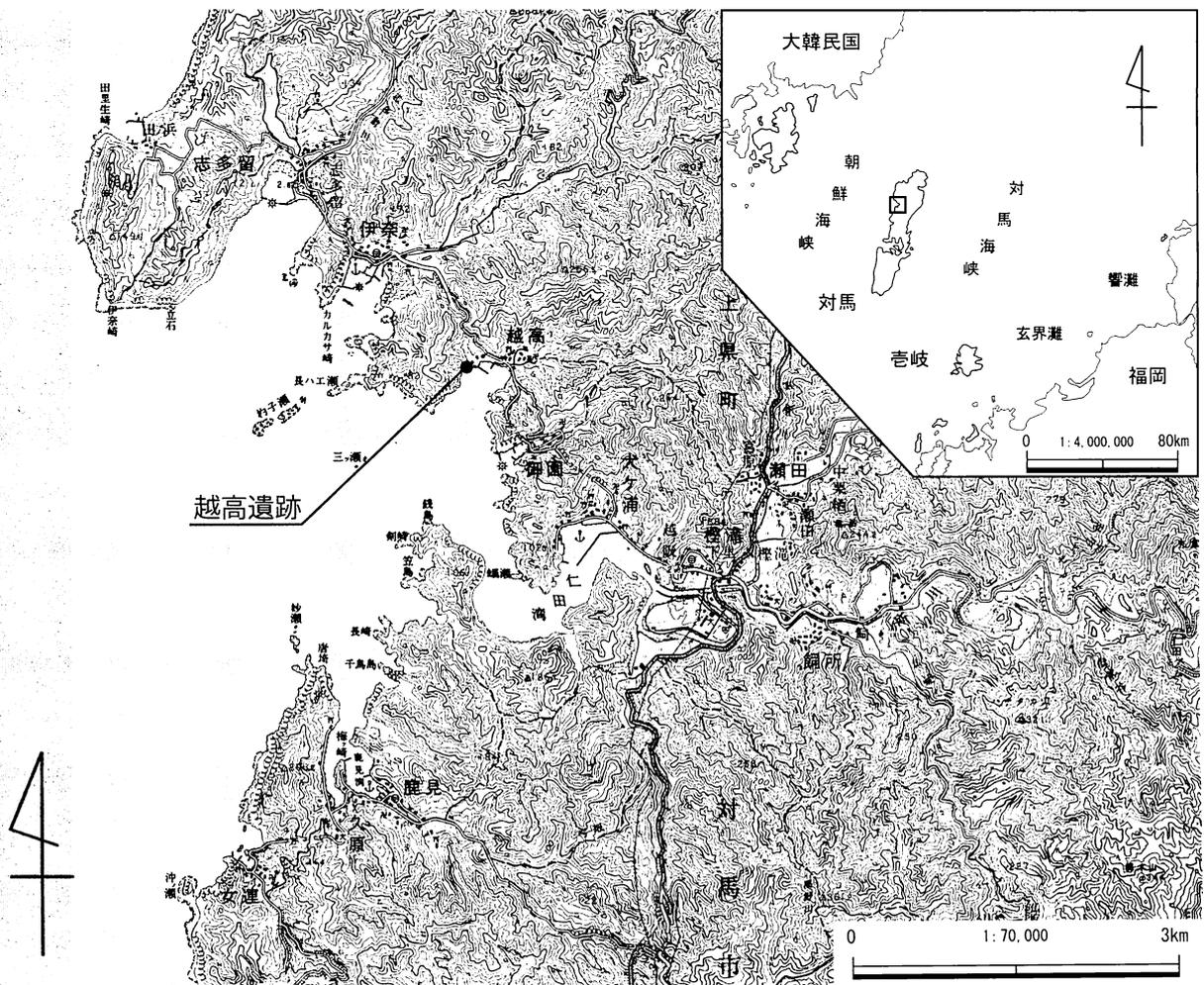
一 位置と環境

1. 対馬の地理的環境と越高遺跡の立地

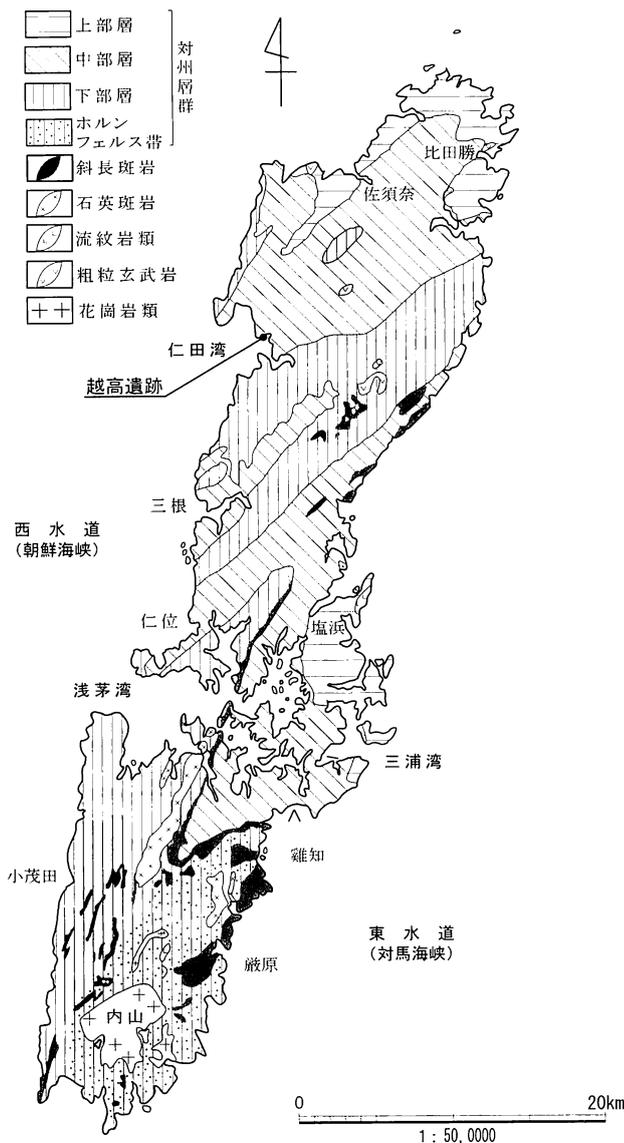
(1) 対馬の環境

対馬の位置と地形 対馬は、九州本土と朝鮮半島間に位置する長崎県の離島である。北方の上島、南方の下島及び周辺の諸島から構成されており、総面積は707.42km²である。北緯34度5分～34度42分、東経129度10分～129度30分に位置し、西側は朝鮮海峡、東側は対馬海峡に面している。対馬から朝鮮半島まで約50km、福岡まで約150kmと、九州本土よりも朝鮮半島に近いことから、「国境の島」とも呼ばれている。

対馬は山林が島土面積の9割を占めている。標高200m～300mの山々が海岸まで続き、平地は極めて少ない。島の北部に比べ南部の方が標高の高い山が多く、対馬の最高峰は下島にある矢立山（標高648m）である。島の南北をはしる分水嶺は島の中心から東に片寄り、対馬の東側が西側よりも急斜面となっている。このため東海岸には沖積地がほとんど形成されていない。また西海岸は沖積地がわず



第1図 越高遺跡位置図



第2図 対馬の地質図 (高橋 1992 を一部改変)

かにあるものの、河口には低地が発達していない。

対馬の海岸線沈降にはリアス式海岸と断層海岸の2種類がある。沈降リアス式海岸は浅茅湾や豊一带にみられ、脚の長い入江の谷間に小集落が営まれており、そこでは遺跡も確認されている。断層海岸は西海岸の棹崎 - 田里生崎、中央部の御崎 - 豆殿崎、東海岸の舟志 - 佐賀間で顕著にみられる。

対馬の地質と環境

対馬の大部分は新生代第三紀の堆積岩である対州層群から成っている。表土は薄く、ゴツゴツとした岩肌が海に沈み込む。対州層群を構成する頁岩や砂岩は風化しやすく、浸透性、流水性が高いという特性をもつ。そのため、水分や養分を保ちきれない漏水性の激しい土質に加え、頁岩の風化土壌で土地が痩せている対馬は、昔から農業に不向きな島とされてきた。

気候は対馬暖流の影響を受けやすい海洋性気候である。冬は比較的温暖で、夏の気温上昇も少ない。対馬の植生はスダジイ、イスノキなどが主体となっている。分布は限られているが、ヒトツバタゴ (絶滅危惧種に指定されている) も自生している。また、対馬には朝鮮半島と日本本土それぞれの特徴をもつ固有生物種が存在し、ツシマヤマネコ、ツシマジカ、ツシマテン、ツシマウラボシシジミ、ツシマカブリモドキなどが存在する。

(2) 越高遺跡の立地

越高遺跡は対馬市上県町越高に所在し、町内を流れる飼所川と仁田川が合流する河口付近にある。遺跡はA・Bの2つの地点から構成され、B地点はA地点より北東に約60m離れた場所に位置する。両地点ともに背後に急斜面が迫っており、その斜面由来の海食崖に遺物を散見することができる。標高はA地点3~8m、B地点4~8mである。付近には対州層群が露出しており、その割れ目に層位的に堆積しながら遺跡が形成されている。遺跡は仁田湾に面しており、波打ち際にあるため偏西風や波浪の影響を受けやすく、また谷口に位置しているため大雨時には渓流水が発生し、それらが原因で遺跡が破壊されつつある。今回はA地点を中心に調査を行った。(藤森)

2. 対馬の歴史的環境

(1) 対馬の原始・古代

縄文時代 対馬においては旧石器時代の遺跡は現在のところ確認されておらず、遺跡が確認されるのは縄文時代早期末からである。

対馬における縄文時代の遺跡からは、朝鮮半島南部との交流を示す韓国新石器時代の土器や北部九州との交流を示す縄文土器、黒曜石製の石器などが出土している。また一部の遺跡からは、漁撈に用いたとされる石器や骨角器が出土している。

早期末から前期にかけての遺跡には、今回調査対象とした上県町越高に所在する越高遺跡がある。この遺跡からは多量の朝鮮半島系の隆起文土器、石鏃や敲石などの石器が出土している。この隆起文土器の出土から、この時期より朝鮮半島南部との交流があったと考えられる。

前期から中期にかけての遺跡には、上県町久原に所在する夫婦石遺跡がある。この遺跡からは曾畑式や阿高式といった縄文土器や、朝鮮半島系の楡目文土器、石斧や石鏃などの石器が出土している。越高遺跡と同様、縄文土器は少量で、楡目文土器が大部分を占めるというのが特徴である。

中期から後期にかけての遺跡には、峰町佐賀に所在する佐賀貝塚がある。佐賀貝塚は縄文時代において、東海岸に位置する数少ない遺跡の一つである。この遺跡からは、結合式釣針や離頭銛など多数の骨角器や石斧、黒曜石製の石器が出土している。出土した黒曜石製石器の多くは腰岳産の鈴桶技法をもつ一群であったため、北部九州との交流があったと想定される。

後期から晩期の遺跡には、峰町吉田に所在する吉田遺跡がある。この遺跡からは、縄文土器の南福寺式土器や石斧などが出土している。

縄文時代の対馬は、出土遺物からみると、早期末から中期にかけて朝鮮半島南部との交流が活発であったが、中期以降交流が低調化するという傾向がみられる。また、全時期を通じた佐賀県の腰岳産や壱岐島産の黒曜石の出土から、壱岐島を介した北部九州との交流が指摘されている。

弥生時代 対馬における弥生時代の遺跡は、中部の東西両海岸を中心に約 190 箇所確認されている。

前期の遺跡には、峰町三根に所在する井手遺跡がある。この遺跡からは、板付式といった弥生土器の他に朝鮮半島系の孔列土器が出土していることから、朝鮮半島南部との交流があったと考えられる。

中期の遺跡には、峰町吉田に所在する恵比須山遺跡がある。この遺跡では、弥生時代中期から古墳時代にかけてつくられた箱式石棺墓が 12 基確認されている。中期の対馬では、箱式石棺を中心とする埋葬遺跡が多く、その副葬品の中には数量・種類ともに豊富な青銅器がみられるようになる。

後期の遺跡には、上対馬町吉里に所在する塔の首遺跡がある。この遺跡においても箱式石棺が確認されている。棺の内外から朝鮮半島系の陶質土器や銅釧、北部九州系の広形銅矛が出土している。

弥生時代の対馬は、墓の副葬品からみて、北部九州と朝鮮半島南部双方との交流があったと考えられる。なお稲作に関しては、遺構のみならず石包丁といった稲作に関する遺物がほとんど出土していないため、実態は明らかでない。

(河内)

古墳時代 対馬は古墳時代においても各地と盛んに交流をしていた。

前期の古墳には、上県町志多留に所在する大將軍山古墳がある。墳丘は確認されていないが、主体部である箱式石棺が確認されている。副葬品は朝鮮半島系と日本列島系が混在して出土している。これらの特徴は、弥生時代の墓制と類似している。

中期の古墳には、美津島町雞知けちに所在する出居塚古墳でいづかがある。島内で最大規模（全長 40 m）の前

方後円墳である。畿内前期古墳の出土例と同型式である柳葉形銅鏃が出土していることから、畿内勢力との関わりをもった首長層の古墳と考えられている。

後期の古墳には、美津島町鶏知に所在する根曾古墳群がある。6基の古墳からは柳葉形鉄鏃や碧玉製管玉、須恵器、鉄刀片などが出土している。

終末期の古墳には、巖原町下原に所在する矢立山古墳群がある。3基の方墳からは須恵器や環座金具、銅鈹、鉄刀などが出土している。これらの方墳の外観には、畿内の終末期古墳である方形壇上積石塚の影響がみられることから、畿内勢力との強い結びつきがあったと考えられる。

以上のことから、対馬の古墳から出土した遺物を見てみると、朝鮮半島や日本列島の文化の影響を受けているという特徴があるため、双方向との交流があったことがわかる。

古代以降 対馬は古くから国防の要所とされ、中世以降は貿易の拠点としての役割も担っていた。

飛鳥時代の遺跡には、美津島町黒瀬に築造された金田城がある。この城は、白村江の戦いで倭軍が唐・新羅軍に敗れたあと、浅茅湾に面した城山に建てられた朝鮮式山城である。遺構として約3kmの長さをもつ石塁がみつまっていることから、唐軍の侵入を防ぐためにつくられた城と考えられている。

鎌倉時代の遺跡には、上県町屋敷畑に所在する大石原遺跡がある。この遺跡からは高麗産の陶磁器が多く出土している。これらの陶磁器は、平安時代に女真族が攻め入った事件（刀伊の入寇）をきっかけに、高麗と日本との間で行われるようになった貿易がもたらしたものである。この貿易以降、対馬は朝鮮半島との貿易の拠点となっていく。

室町時代の遺跡には、美津島町尾崎に所在する水崎遺跡がある。明・朝鮮半島からの陶磁器が多く出土しており、盛んに貿易が行われていたことがわかる。しかし室町時代から安土桃山時代にかけて、三浦の乱や朝鮮出兵を契機に、朝鮮と対馬の関係断絶が起こった。当時朝鮮との貿易に大きく依存していた対馬は、国交断絶の度にその回復に尽力した。

江戸時代になると宗氏の居城として巖原町今屋敷に金石城、巖原町棧原に棧原城が築かれた。金石城からは、瓦や国産の陶磁器が出土している。朝鮮通信使を迎えるためにつくられた城である棧原城からは、朝鮮王朝陶磁が多数出土している。 (渡邊)

(2) 対馬における遺跡立地の変遷

縄文時代・弥生時代

対馬は南北に険しい山々がそびえたち、山間部に集落はほとんどない。海岸部においては断崖が多く、結果として対馬の遺跡は、海岸部のわずかに開けた平地や丘陵部に立地する傾向にある。

縄文時代の遺跡は数が少ないため、時期ごとに立地の変遷を検討するのは難しい。これまでに確認された遺跡は上島の方がやや多く、西海岸を中心に分布する傾向にある。このような傾向がみられる要因としては、西側に比べて東側は平地が少ないことが考えられる。そして、集落遺跡の多くは小規模であるものの、朝鮮半島や九州本土との交流がうかがえる遺物や遺構が出土している。

対馬における弥生時代の遺跡は、確認されているもののほとんどは埋葬遺跡であり、全体的に岬の先端や海を臨む丘陵上に立地する傾向がある。そして、その多くは箱式石棺墓であり、北部九州でもみられる支石墓は確認されていない。

弥生時代前期から中期前半の遺跡は数が少ないため、立地の変遷を検討しづらい。しかし、中期後半から後期前半にかけては、上島南部の峰町三根湾周辺や浅茅湾に面する豊玉町仁位・佐保浦地区において、数量・種類ともに豊富な舶載品の青銅器を出土する埋葬・埋納遺跡が集中する。上島北部にも青銅器を副葬した箱式石棺墓が見つまっているが、遺跡数としては三根や仁位・佐保浦には及ばな

い。以上のことや副葬品青銅器の出土量や種類も含めて考慮すると、三根や仁位・佐保浦が中心的な地域であったと考えられる。

後期後半から終末期に入ると、三根地区では豊富な副葬品を持つ埋葬遺跡はみられなくなる。仁位・佐保浦地区においても、埋葬遺跡における副葬品の種類や量は減少するものの、銅矛の埋葬量が他地域を圧倒している。以上より、遺跡分布の中心がそれまでの峰町三根地区と豊玉町仁位・佐保浦地区であったものが、仁位・佐保浦地区へと移り変わったことがわかる。

遺跡の分布はその後、南北へと広がりを見せるようになり、後期後半には下島においても箱式石棺墓が築かれるようになる。なかでも、浅茅湾岸地域で青銅器を多数副葬した箱式石棺墓がみられるようになり、美津島町雞知地区を中心とする浅茅湾南岸地域が下島において遺跡分布の中心をなしたと考えられる。
(姫野)

古墳時代以降

古墳時代の対馬は、埋葬遺跡が多く、その立地の様相は弥生時代と変わらない。

中期になると、根曾古墳群の1号墳に代表されるような前方後円墳が築造されるようになる。そして、古墳時代の後期から終末期になると、下島南部まで古墳築造の波は広がり、下島南岸にも終末期の古墳が築造されるようになる。雞知地区では中期から終末期にかけて古墳が築造され続けており、この地域は古墳時代を通して対馬の中心的地域であったと考えられる。

古代になると、朝鮮式山城である金田城の築城や、国府の設置など、下島に中央政権の施設が集中して置かれるようになる。特に厳原地域は、中世には宗氏の館が、近世には金石城などの城郭が築かれ、政治、経済の中心になり、現代に至るまで対馬の中心的地域として機能している。
(石本)

<第一章 参考文献>

- 小田富士雄 1984「対馬・宍岐の古墳文化」『日本古代史講座』第2巻 学生社：pp. 109 - 130
- 古門雅高編 1996『大石原遺跡』上県町文化財報告 第1集 上県町教育委員会
- 坂田邦洋 1975「志多留貝塚」『対馬の考古学』縄文文化研究会：pp. 95-185
- 坂田邦洋 1979「対馬越高尾崎遺跡における縄文前期文化の研究」別府大学考古学研究室報告 第3冊 別府大学考古学研究室
- 正林護編 1986『佐賀貝塚（略報）』峰町文化財調査報告書 第8集 峰町教育委員会
- 正林護 1989『佐賀貝塚』峰町文化財調査報告書 第9集 長崎県峰町教育委員会
- 正林護 1995『ながさき古代紀行 vol. 1 対馬』タウンニュース社
- 瀬野精一郎ほか 1998『長崎県の歴史』山川出版社
- 副島和明 1992『長崎県埋蔵文化財調査集報 XV』長崎県文化財調査報告書 第104集 長崎県教育委員会
- 高倉洋彰 1986「弥生時代の対馬とその社会」『えとのす』第30号 新日本教育図書：pp. 38-44
- 高野晋司編 1994『金石城』長崎県厳原町文化財調査報告書 第3集 厳原町教育委員会
- 高野晋司 2005『日本海城歴史体系』第1巻 清文堂
- 高橋清 1992「対馬地域」『九州地方』日本の地質9 共立出版：pp. 120-123
- 田中淳也編 2011『金田城跡IV』対馬市埋蔵文化財調査報告書 第6集 対馬市教育委員会
- 田中健夫 1992『朝鮮通信使と日本人』学生社
- 長崎県教育委員会 1974『対馬 浅茅湾とその周辺の考古学調査』長崎県文化財調査報告書 第17集 長崎県教育委員会
- 長崎県考古協会 1995『長崎県の考古学』長崎県労働金庫
- 廣重知樹編 2018「第1部 越高遺跡」『考古学研究室報告』54：pp. 3 - 52
- 外山幹夫 1996『図説 長崎県の歴史』河出書房新社：pp. 18 - 32
- 福田一志編 1999『水崎遺跡』美津島町文化財調査報告書 第8集 美津島町教育委員会
- 福田一志編 1997『浅原城跡調査報告書』長崎県文化財調査報告書 第138集 長崎県教育委員会
- 藤田和祐 1998「対馬の古墳文化」『原始・古代の長崎県』通史編 長崎県教育委員会：pp. 521-525
- 古澤義久 2014「玄海灘島嶼域を中心にみた縄文時代日韓土器交流の性格 - 弥生時代早期との比較 -」『東京大学考古学研究室研究紀要』第28号 東京大学文学部考古学研究室：pp. 27-80
- 宮本一夫編 2004『対馬古田遺跡 - 縄文時代遺跡の発掘調査 -』九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室

二 越高遺跡A地点の調査

1. 調査経過

(1) 既往の調査（第1次調査～第6次調査）

越高遺跡は1970年に対馬郷土研究会によって発見された。契機となったのは第3図の隆起文土器である。本資料は、九州大学による対馬2次調査時に木村幾多郎氏により実測されたものである。木村氏は、越高遺跡で採集された土器に刻目のある横隆帯と細隆起線が施文されている点に注目し、東三洞貝塚出土土器との類似性を指摘した(西・木村1974)。その後坂田邦洋氏を中心として発掘調査(第1・2次)が実施され、本遺跡は隆起文土器を中心とする朝鮮半島系の土器が多数出土する遺跡として注目されるようになった。

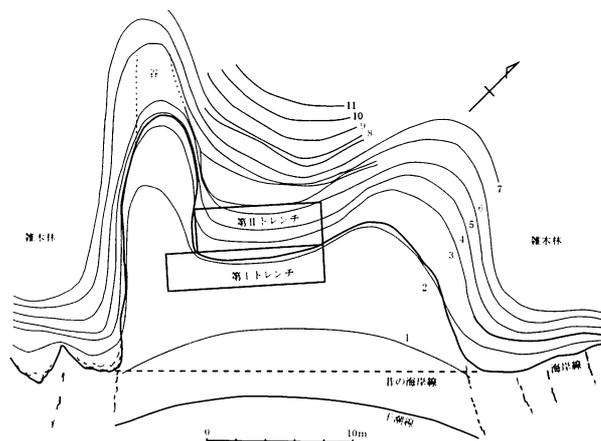
第1次調査は越高遺跡B地点(当時、越高遺跡と呼称)を対象とし、1976年12月11日～17日の日程で行われた。調査主体は、上県町教育委員会と長崎大学医学部解剖学第二教室である。調査区は、海岸部崖面の前に第Iトレンチ、傾斜地に第IIトレンチが設定された(第4図)。調査の結果、第IIトレンチでは地表下1～3mにかけて良好な遺物包含部層が確認され(第5図)、包含層から朝鮮半島系の隆起文土器を主体とする多数の遺物が出土している。縄文土器は、前平式土器が7点出土したと報告されている。石器は、石鏃、石槍、石匙、削器、石斧、石核などが出土している。また出土位置は不明だが、土壙墓が2基検出されたと報告されている(坂田1978)。

第2次調査は越高遺跡A地点(当時、越高尾崎遺跡と呼称)を対象とし、1978年7月16日～22日の日程で行われた。調査主体は上県町教育委員会であり、調査目的は隆起文土器の編年を明確にすることであった。調査区は、崖面東寄りの遺物包含層が露出した場所に設定された(第6図)。調査の結果、縄文時代早期から前期に相当する6枚の遺物包含層が確認された(第7図)。この調査では縄文土器と隆起文土器の併行関係が確認され、上層では縄文土器が、下層では隆起文土器が多く出土するという傾向が指摘された。また遺構として、第II層から2基、第IV層から1基の炉跡が報告されている(坂田1979)。

第3次調査は越高遺跡(当時、越高浜遺跡と呼称)A・B地点を対象とし、1996年8月26日～9



第3図 越高遺跡で採集された土器(木村氏実測)



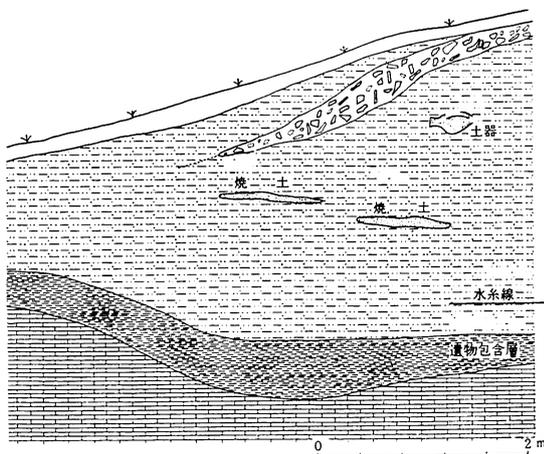
第4図 第1次調査 調査区位置図(坂田1978より)

月13日の日程で行われた。調査は長崎県教育庁文化課を主体に、上県町教育委員会の協力を得て行われた。調査目的は、遺構が消滅段階にあるとの危惧から、遺跡の範囲を確認することであった。第2次調査以降、約20年を経て遺跡が海水の浸食にさらされ、第2次調査から海岸部の地形がかなり後退していることが確認された。調査区はA地点に3箇所、B地点に2箇所設定された。第3～5調査区において、隆起文土器や沈線文土器の出土が報告されている。しかし波浪の影響や包含層が深いなどの点から、十分に調査が行われなかったため、遺跡の範囲は依然不明のままに終わっている(東・福田 1998)。

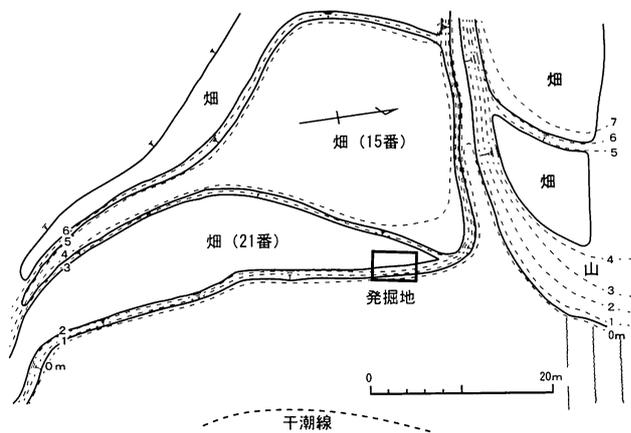
このように、越高遺跡は日韓新石器時代の交流史を考える上できわめて重要であるにも関わらず、その規模も性格も判然としない状況であった。その後も台風などによる波浪の影響で遺跡が破壊されつつあるとの情報があり、発掘調査による実態解明が喫緊の課題とされた。そこで熊本大学文学部考古学研究室は対馬市教育委員会と合議し、共同で本遺跡の残存状況を探るため発掘調査を行うことにした。

第4次調査は、熊本大学文学部考古学研究室と対馬市教育委員会を調査主体とし、遺跡包含層の堆積状況の確認のために、2015年8月16日～24日の日程で実施した。調査区はA・B両地点の海岸部と谷部の崖面に1箇所ずつ、計4箇所に設定した。その結果、遺物包含層はA・B両地点に良好に残っていることを確認できた。A地点では海岸部調査区において、第2次調査と概ね一致する土層堆積状況を確認したが、遺物の出土がなかったため、各層の時期比定はできなかった。谷部調査区においては、隆起文土器や石器を含む遺物包含層を確認し、遺跡の範囲が北西部に広がる可能性が高まった。B地点では、海岸部調査区と谷部調査区で複数の遺跡包含層を確認し、特に6層(第5次調査の第4層に相当)においては隆起文土器を含む遺物が多数出土した。6層は、第1次調査における遺物包含層に相当するものと推定されたが、第1次調査で検出された遺物包含層直下の岩盤は、6層下では確認できなかった(山元編 2016)。

第5次調査は、越高遺跡B地点を対象とし、2016年9月11日～22日の日程で実施した。調査主体は熊本大学文学部考古学研究室と対馬市教育委員会である。調査目的は、第4次調査で不明瞭であった層序の把握と、第1次調査において遺跡包含層直下より検出された岩盤の確認であった。調査区は、海岸部崖面と谷部崖面の2箇所に設定した。調査の結果、海岸部と谷部の層序に対応関係がみられることが明らかになった。最終的に5枚の堆積層を確認した。出土遺物は第3～5層から出土し、



第5図 第1次調査 土層断面図(坂田 1978 より)



第6図 第2次調査 調査区位置図(坂田 1979 より)

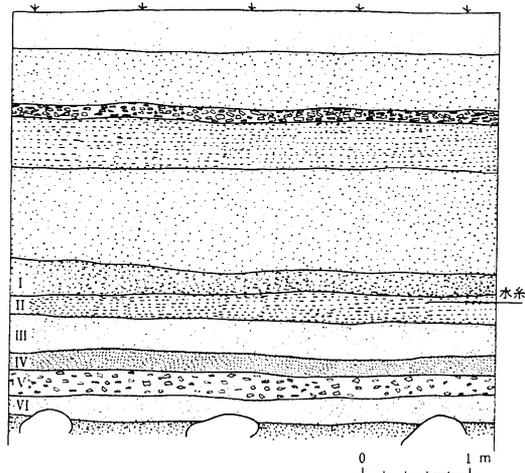
二 越高遺跡A地点の調査

土器、石器、炭化物であった。土器の多くが朝鮮半島の新石器時代にみられる隆起文土器である。土器の垂直的な出土集中部とその間の型式差、それらに伴う放射性炭素年代値などから、2時期に分かれることが明らかになった。石器は石鏃、スクレイパー、砥石、敲石などが出土している。しかし、第4・5次調査でも、第1・2次調査で検出された埋葬跡や炉跡などの遺構は全く検出されなかった。さらに徳島大学西山賢一氏による調査では、遺跡包含物そのものが崖錐性堆積物であるとの地質学的所見から、遺跡が二次堆積物によるものである可能性も否定できない。このため、この時点では遺跡の性格はもとよりその成因すらよく分からない状況であった（岡田・豊永編 2017）。

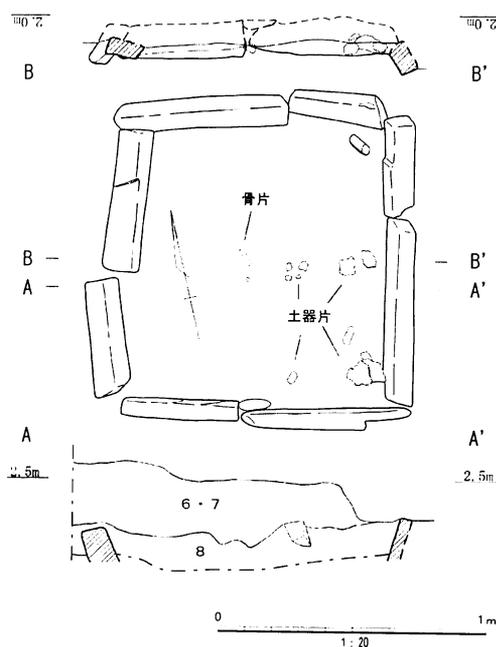
第5次調査ののち、B地点において対馬市教育委員会による追加調査（2016年10月3日～10月20日）が実施され、第5次調査の海岸部の地表下1mの部分から第5層相当の遺物包含層が確認され、そこから第5次調査の第4層出土土器とほぼ同じ様相の土器が発見された。この結果を受け、遺跡の規模や広がり、成因の究明のためには、B地点における継続調査が必要である点、A地点においても遺物の出土が谷部だけでなく海岸部からもみられ、遺跡や包含層の広がりがまだまだ明確になっていない点などから、対馬市教育委員会と合議し、両地点における継続調査（第6次）を行うことにした。

第6次調査は越高遺跡A・B地点（第9図）を対象に、2017年9月9日～21日の日程で実施した。調査区はA・B地点にそれぞれ1箇所設定した。A地点では第4次調査崖面から海岸への遺物包含層の広がりの確認を目的とした。第6次調査区は南北方向に長辺をとる形で、第4次調査と同一地点の崖下に設定した。調査の結果、遺物包含層が海岸へ広がることを確認し、炉跡を検出できた。B地点では、下層の遺跡包含層の平面的、垂直的な広がりの確認と岩盤の検出を目的とし、調査区は東西方向に長辺をとる形で、第5次調査と同一地点の崖下にやや広めに設定した。第6次調査の結果、遺跡包含層が海岸に面的に広がること、調査区東側に岩盤が露出し、西側の岩盤を合わせたその地勢から、遺跡が対州層群の岩盤割れ目（谷地形）に層位的に堆積をしながら形成されたことが判明した（廣重編 2018）。

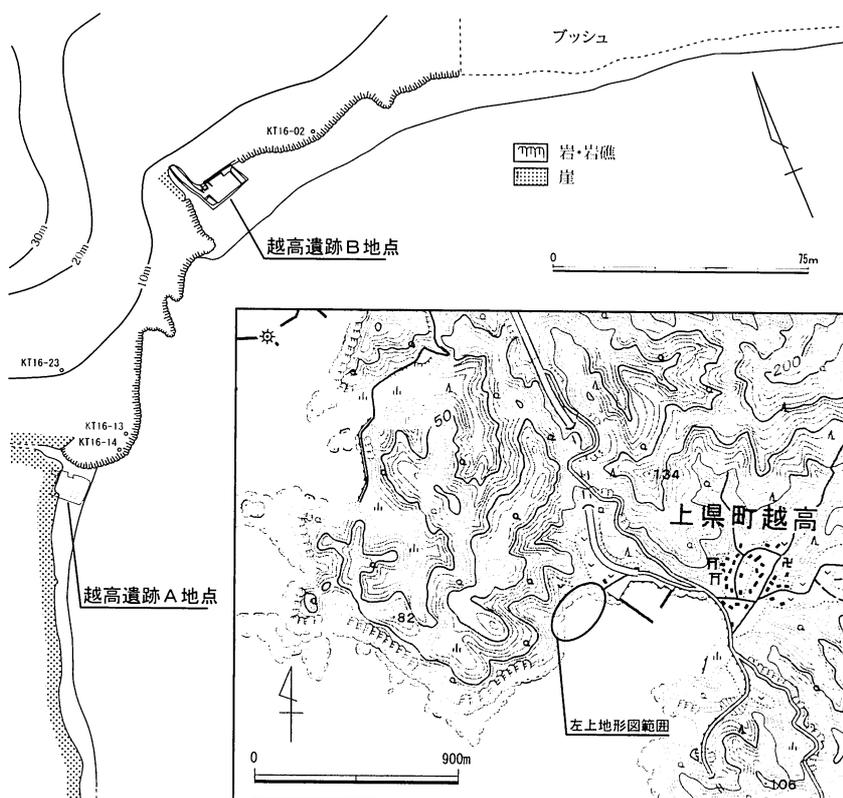
（森）



第7図 第2次調査 土層断面図（坂田 1979）



第8図 第6次調査 検出炉跡図
（廣重編 2018 より）



第9図 越高遺跡A・B地点位置図

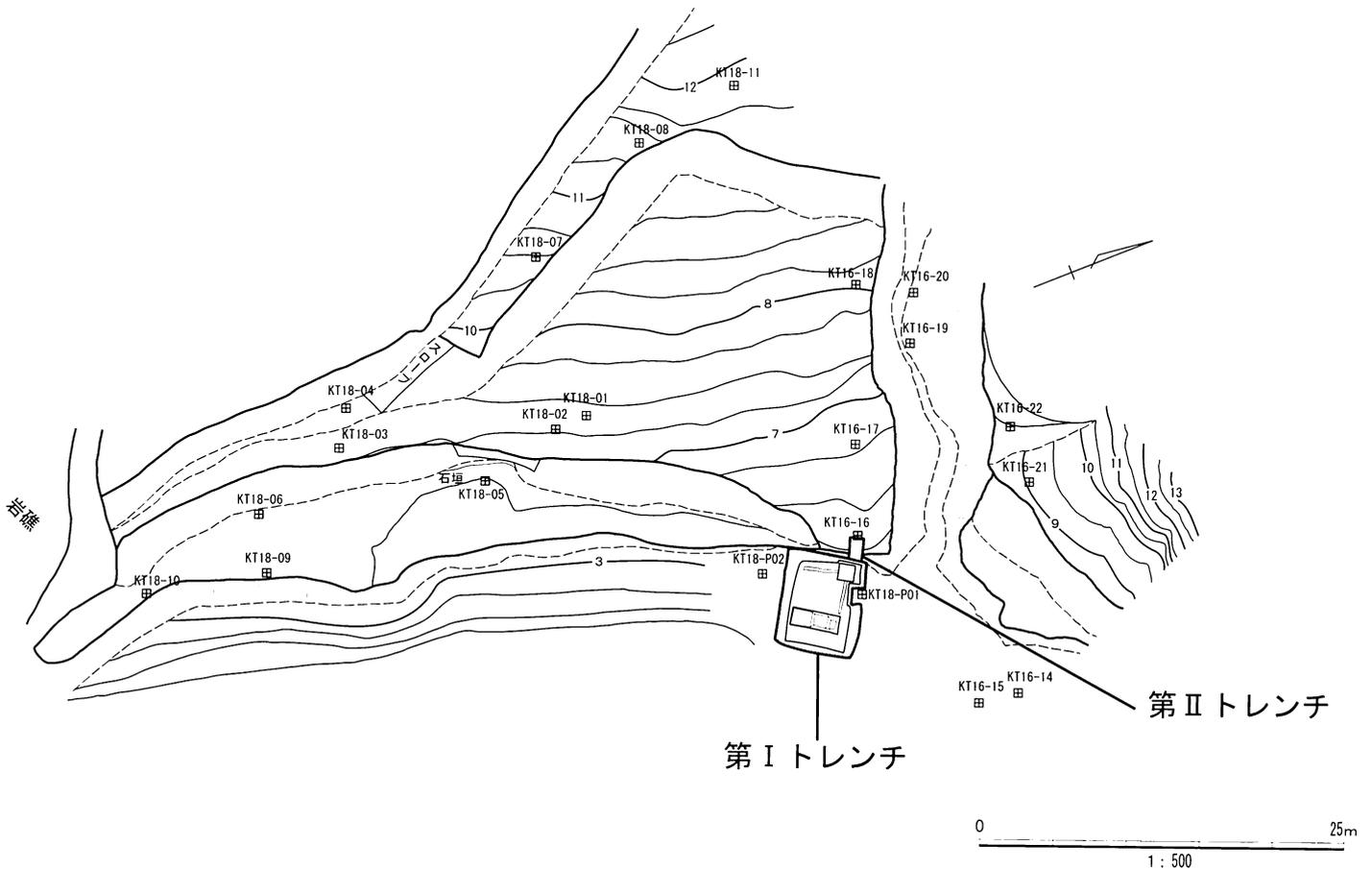
第1表 越高遺跡基準点座標一覧（局地座標）

基準点名	X座標 (m)	Y座標 (m)	Z座標 (m)	備考
KT18-01	-20.250	-72.858	7.470	第10図
KT18-02	-22.397	-73.642	7.364	第10図
KT18-03	-33.716	-83.041	7.488	第10図
KT18-04	-31.445	-84.711	7.918	第10図
KT18-05	-28.291	-74.483	5.550	第10図
KT18-06	-40.789	-83.646	5.637	第10図
KT18-07	-15.093	-82.999	10.638	第10図
KT18-08	-4.271	-83.571	11.541	第10図
KT18-09	-43.240	-80.395	2.974	第10図
KT18-10	-49.993	-85.104	5.715	第10図
KT18-11	2.891	-81.743	12.049	第10図
KT18-P01	-15.434	-50.754	2.974	第10図
KT18-P02	-19.343	-56.565	3.138	第10図

(2) 今回の調査 (第7次調査)

今回の調査は越高遺跡を対象とした調査としては7回目、熊本大学の調査としては2015年の第4次調査から数えて4回目にあたる。調査は越高遺跡A地点を対象に、2018年9月7日～20日の14日間実施した。今回の調査の目的は、第2次調査で報告された縄文土器包含層の確認を含めたA地点の遺物包含層の堆積状況の把握、および本遺跡の性格・時期の解明である。調査区は一昨年度年度の調査区を拡張する形で第Iトレンチ、土層断面を確認するために崖面を掘り下げる形で第IIトレンチを設定した。遺物の出土に際してはトータルステーションを用いて記録を行った。レベル高は第4次調査において三角点D7-1より移動したものを利用し、座標は第1表に示した局地座標を今回新たに設定して利用した。また、波の浸食により遺物包含層を含めた崖面が削られ後退していることを受けて、地形の改変が少ない崖上の地形測量をより詳細に行った (第10図)。

調査の結果、第Iトレンチにおいて炉跡が竪穴住居に伴うものなのかは確認できなかった。また、昨年度B地点で見られた岩盤層の検出を目的として、調査区の一部を深く掘り下げたが、岩盤に相当する層を確認することはできなかった。第IIトレンチにおいては坂田邦洋氏による第2次調査とほぼ同時期にあたると思われる遺物包含層を確認した。過去の調査区的位置を把握するにあたって、前述した地形改変の影響から、正確な位置を把握しかねていたが、今回作成した地形測量図により、今回の第Iトレンチとほぼ重なることが判明した。 (嘉戸)



第10図 A地点測量図

2. 調査の概要

1. 第 I トレンチ

(ア) 調査区の設定 (第 10 図)

越前遺跡 A 地点は越前遺跡 B 地点から南西約 60 m の地点に位置し、その間は岩礁となっている。海岸沿いに高さ 3 m ほどの崖面が南に約 50 m 続いていた。満潮時には海水面がトレンチの中にまで迫ることが多い。

今回の調査では、第 6 次調査区と同一地点に南北 6 m、東西 4 m の調査区を設け、これを第 I トレンチとした。第 6 次調査の炉跡の東側と南側にサブトレンチを設け、竪穴住居の立ち上がりとその遺構内の床面の有無を確認しようとしたが遺構内に伴う炉跡ではないと判断した。そして、第 6 次調査に深く掘り下げたトレンチをさらに西側に拡張させ、遺物包含層の観察を行った。

(イ) 調査区の層序 (第 11 図)

今回の調査では第 4～10 層の 7 枚の土層を確認した。本調査区の土層は第 6 次調査に準拠している。

第 4 層は厚さ約 0.4～0.5 m の砂利層である。波による再堆積層である。しまりは悪い。

第 5 層は厚さ約 0.2 m の褐色の混礫土層である。礫の大きさは約 3～4 cm であり、間に細かい砂粒が詰まっている。しまりはやや悪い。

第 6 層は厚さ約 0.4～0.5 m の黄褐色の混礫粘土層である。礫の大きさは約 2～3 cm であり、礫が密集している。しまりはやや良い。

第 7 層は厚さ約 0.2～0.4 m の褐色の砂礫土層である。しまりはやや良い。

第 8 層は厚さ約 0.1～0.2 m の暗褐色のシルト質土層であり、大きな礫は含まれていない。しまりは良く、粘性はやや弱い。

第 9 層は厚さ約 0.4 m で、黄褐色の砂質シルト質土層である。礫が混じっており、礫の大きさは約 6～7 cm である。しまりはやや悪い。大礫が見られ、第 2 次調査で人頭大の円礫が混じると報告された層に相当する可能性がある。

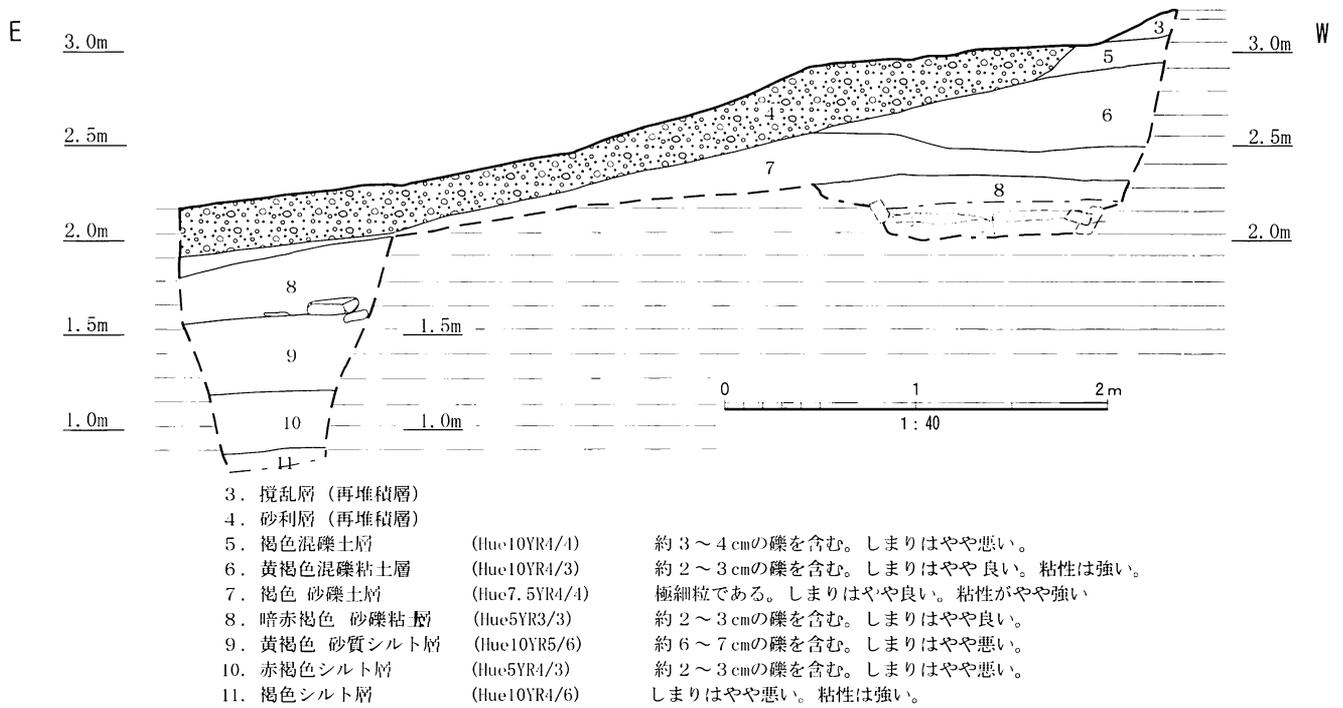
第 10 層は厚さ約 0.3 m のシルト質土層である。しまりはやや悪い。約 2～3 cm の角礫が混じっている。

(ウ) 遺物出土状況

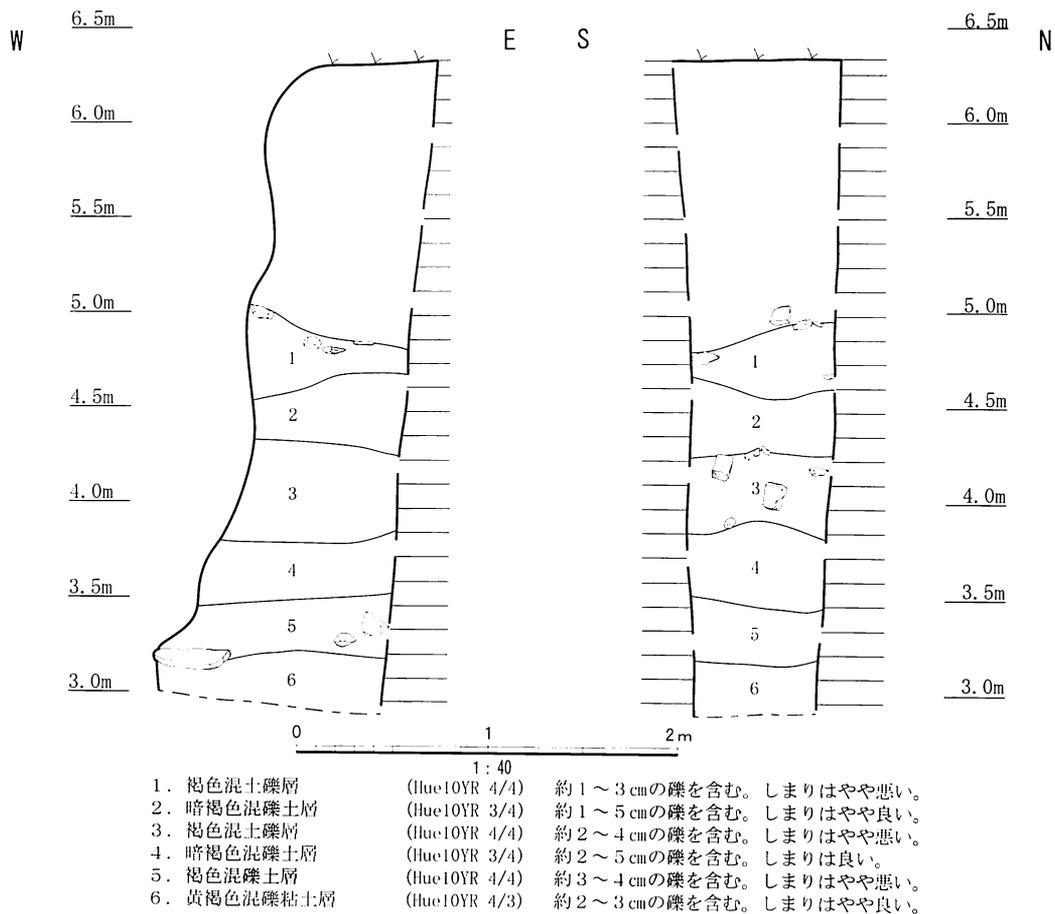
遺物は第 6～10 層で出土した。出土した遺物は土器 273 点(炭化物付着土器 3 点含む)・石器 66 点・炭化物 9 点である。内訳は、第 6 層から土器 15 点・石器 1 点・炭化物 1 点、第 7 層から土器 71 点・石器 21 点・炭化物 2 点・炭化物付着土器 1 点、第 8 層から土器 149 点・石器 22 点・炭化物 4 点、第 9 層から土器 24 点・石器 13 点・炭化物 1 点、第 10 層から土器 16 点・炭化物 1 点・炭化物付着土器 2 点、層位不明の土器 5 点・石器 9 点となっている。第 7 層出土の炭化物(1 点)と第 10 層出土の炭化物付着土器は放射性炭素年代測定法(AMS 法)を用いて分析を行った。詳細は第 3 章自然科学分析で報告する。

(中野)

二 越高遺跡A地点の調査



第 11 図 A 地点第 I トレンチ南壁土層断面図 (廣重編一部加筆 2018)



第 12 図 A 地点第 II トレンチ土層断面図 (左：南壁 右：西壁)

2. 第Ⅱトレンチ

(ア) 調査区の設定 (第10図)

今回の調査では、縄文土器と隆起文土器の両方が確認されている第2次調査の層位との照合を目的として第Ⅰトレンチの西側崖面に第Ⅱトレンチを設定した。崖上には多くの植物が生えており、それらを除去した後に、発掘調査を行った。第6次調査のA地点調査区西側土層断面図と対応させるため、トレンチ範囲を当時の調査区の西側崖面から東西1.2m、南北0.9mに設定し、崖上から標高2.9mまで深さ3.4m掘り下げた。

(イ) 調査区の層序 (第12図)

調査の結果、耕作土を含め7枚の土層を確認することができた。ほぼ全ての層に細長い小礫が含まれていたが、これは遺跡周辺の地質を構成する対州層群の風化により生じた頁岩や砂岩の礫である。全体的に、土層は海側に向かって緩やかに傾斜している。

表土層は、耕作土由来の混礫土層である。本層は、二層に分層可能であるが、今回は一つの層とした。

第1層は厚さ約0.1～0.4mの褐色の混礫土層である。礫は約1～7cmの細長い角礫が全体的に密集し、層の上端には約10～15cmの角礫が点在している。しまりはやや悪い。

第2層は厚さ約0.2～0.4mの暗褐色の混礫土層である。礫は約1～5cmの円礫である。しまりはやや良い。

第3層は厚さ約0.4～0.5mの褐色の混礫土層である。礫は約2～4cmの細長い円礫が全体的に密集する。その大部分は、水平に堆積している。しまりは良い。

第4層は厚さ約0.3～0.5mの暗褐色の混礫土層である。礫は約2～5cmの細長い円礫であり、層の下部では水平に堆積している。しまりは良い。

第5層は厚さ約0.2～0.4mの褐色の混礫土層である。礫は約3～4cmの円礫が主体を占め、約10～35cmの円礫が混在している。しまりはやや悪い。

第6層は厚さ約0.4～0.5mの黄褐色の混礫粘土層である。礫は約2～3cmの円礫であり、水平に堆積している。しまりはやや良い。

第4～6層は出土遺物や比高差から第2次調査の第Ⅱ・Ⅲ層にあたりと考えられる。詳細は、第4章まとめて報告する。

(ウ) 遺物出土状況

遺物は第1～6層で出土した。出土した遺物は土器28点(炭化物付着土器2点含む)・石器6点・炭化物18点である。内訳は、第1層から炭化物3点、第2層から炭化物3点、第3層から炭化物1点、第4層から土器12点・石器1点・炭化物付着土器1点・炭化物2点、第5層から土器5点・石器2点、第6層から土器11点・石器3点・炭化物付着土器1点・炭化物9点である。第6層の炭化物付着土器は、放射性炭素年代測定法(AMS法)を用いて分析を行った。詳細は第3章自然科学分析で報告する。(宮浦)

3. 出土遺物

(1) 土器 (第13・14図) (第2・3表)

本調査では総計298点の土器が出土した。その内、図示した資料は81点である。その多くが朝鮮半島南海岸地域で出土している隆起文土器である。

今回、図示した土器は文様を基準として3種類に分類した。型式不明の土器はその他とした。各分類の層位ごとの出土状況は第2表に記す。

I 類土器：隆帯文や隆起線文を有する土器。I 類土器は以下の3つに細分類する。

I a 類：口縁に平行する隆帯1条～数条を基本とし、その下部に斜位や縦位の隆帯をもつ。工具または指頭で隆帯に刻目を施すもの。

I b 類：口縁に平行する隆帯文または隆起線文1条を基本とし、その下部に隆起線で数条からなる斜線文、三角文や幾何学文を施すもの。

I c 類：口縁に平行する隆帯文1条を基本とし、その下部に数条の沈線文を斜位や縦位に施すもの。沈線文のみの場合でも、同様な文様構成がみられる場合はこちらに含む。

I a 類【3・4・5・37・38・39・40・41・42・43・61・68・70・81】

14点図示している。第7層3点、第8層8点、第9層1点、第10層1点、表面採集(以下、層位不明)1点である。

4、5は隆帯文が2条確認できる。61は壺形である。斜位の隆帯文が1条施文され、その直下に横位に隆帯文が施文されていることから、鋸歯状と考えられる。

I b 類【6・7・9・10・11・44・45・69】

8点図示している。第7層5点、第8層2点、第9層1点である。

9は磨滅が激しいが、隆起線文が山形に施文されている。10は横位に隆帯が1条施文され、隆帯直下に隆起線が山形に施文されている。11は横位に隆帯が1条施文され、隆帯直下に隆起線が施文されている。44は隆起線が縦位に数条施文され、横位に1条施文されている。45は斜位に隆起線が1条施文され、それに平行するように2条沈線が施文されている。69は口縁部であり、横位に隆起線が1条施文され、直下に山形に数条施文されている。

I c 類【12・13・14・15・27・47・48・49・50・51・52・53・54・56・57・60・63】

17点図示している。第7層5点、第8層12点である。

12は横位に隆帯が1条施文され、隆帯直下に複数の沈線が施文されている。沈線は縦位に施文した後、山形にも施文されていることが確認できる。13・53は沈線が格子状に施文されている。15、56は沈線が斜位に、52・57は沈線が縦位に施文されている。また49・50・51は沈線が縦位に施文されたのち、斜位に施文されている。これらは27や60にみられるような文様構成と考えられる。27は口縁部である。横位に隆帯が1条施文され、隆帯文直下に複数の沈線が施文されている。沈線は縦位に施文されたのち、3条一単位で山形に施文されている。また隆帯文上部にも押引文が確認できる。47は横位に隆帯が1条施文され、隆帯文直下に沈線が複数施文されている。48・60・63は横位に隆帯が1条施文され、隆帯直下に複数の沈線が施文されている。60は隆帯文直下に複数の沈線が施文されている。縦位に沈線を施文した後、斜位に施文されている。63は隆帯文から延長するように沈線が施文されている。なお、60・63は口縁部である。

第2表 出土土器各層出土状況

層\分類	I類			II類	III類	その他	合計
	a	b	c				
第4層	-	-	-	-	2	1	3
第5層	-	-	-	1	1	-	2
第6層	-	-	-	2	1	3	6
第7層	3	5	5	2	-	19	34
第8層	8	2	12	-	-	9	31
第9層	1	1	-	-	-	-	2
第10層	1	-	-	-	-	-	1
表面採集	1	-	-	1	-	-	2
合計	14	8	17	6	4	32	81

II類土器：指でつまみ上げる三角隆起線が基本であり、条痕調整が施されているもの。数条ある隆起線の間が密に接するものも含む【28・29・74・76・78・79】

6点図示している。第5層1点、第6層2点、第7層2点、層位不明1点である。

28と29は同一個体である。口縁部は横→斜めの順に条痕調整され、胴部に隆起線が施文されている。また、補修孔も確認できる。76・78は第6層で出土した土器であり、隆起線を指でつまんで施文した様子が観察できる。78は内面に条痕を丁寧にナデ消した痕がみられる。

III類土器：短沈線などが施されている土器【71・72・75・77】

4点図示している。第4層2点、第5層1点、第6層1点である。

71は口縁部に短沈線が施されている。72は横走魚骨文が確認できる。75は第5層で出土した土器である。細片であるので詳細は不明だが、短沈線が施文されている。77は第6層で出土した土器である。隆帯が3条横位に施文され、斜位に2条施文されているのが確認できる。隆帯が施文されているが、刻目の間隔が狭いため、本類に分類している。

<その他>

底部【31・32・33・34・35・64・65・66・67】

9点図示している。第7層5点、第8層4点である。すべて平底である。

条痕を有する土器【2・8・16・18・19・20・21・22・23・24・26・58・73】

13点図示している。第4層1点、第6層1点、第7層10点、第8層1点である。横位に条痕調整されていることが多いが、22のように斜位に条痕調整されているものもある。

押引文を有する土器【46・55】

2点図示している。第8層2点である。46は押引文ののち、隆帯が2条施文されている。55は横位に押引文が2条施文され、その上部にも押引文が施されている。

沈線を有する土器【1・80】

2点図示している。第6層2点である。1は横位に沈線が施文され、80は沈線が格子状に施文されている。

瘤状突起を有する土器【17】17は第7層出土である。器面に瘤状突起が貼り付けられている。

無文土器【25・30・36・59・62】

5点図示している。第7層3点、第8層2点である。

17は瘤状貼付土器である。30は口縁部である。口縁部が外反しており、補修孔が確認できる。36は浅鉢で丸底である。

I類土器は韓国新石器時代早期の隆起文土器、II類土器は縄文時代早期末～前期前葉の轟B式土器、III類土器は縄文時代前期の西唐津式または韓国新石器時代前期の瀛仙洞式土器に相当する。（齋藤）

(2) 石器 (第15～21図)

本調査では72点の石器が出土した。その内、図示した資料は55点である。以下図示した遺物について述べる。

剥片 1～6・10・11・14～20・25・31・32・34は黒曜石製、7～9・12・13・23・24・26・27は頁岩製の剥片である。6は黒曜石製の縦長剥片で、表面左側縁部に微細剥離が認められる。18は黒曜石製の横長剥片で右側縁に微細剥離が認められる。

石核 21は頁岩製、33は黒曜石製の石核である。剥片の主要剥離面を打面として、剥片を剥離している。22は黒曜石製の石核で作業面を再生したものである。35は黒曜石製の石核である。

スクレイパー 28～30はスクレイパーである。28は砂岩製のスクレイパーで、両面から剥離を施し刃部を形成している。風化が進んでいる。29は頁岩製の縦長剥片を素材とし、主要剥離面側に剥離を施して刃部を形成している。30は砂岩製のスクレイパーで、両面から剥離を施し、刃部を形成している。

敲石・磨石 37～39・42～47は敲石である。37は砂岩製の敲石で、今回出土した敲石の中では大型の製品である。全面に敲き痕が残る。38は砂岩製の敲石で平坦な面を利用して敲打している。39は砂岩製の敲石で、周縁部を利用している。敲き痕の周辺に滑らかなになった部分がみられ、敲石と磨石の役割を持っていたと考えられる。40は頁岩製の磨石である。平坦な面が摩擦により滑らかなになっている。側縁に敲き痕がわずかにみられる。41は頁岩製の磨石である。全面的に滑らかな面を持っている。42は砂岩製の敲石である。全面にまばらに敲き痕が見られる。43は砂岩製の敲石である。表面に大きなくぼみが生じている。44は頁岩製の敲石である。側縁に敲き痕があり、下部は衝撃により剥離している。45は砂岩製の敲き石である。楕円形を呈し、縁辺部を利用している。46は頁岩製の敲石である。滑らかな面を残し、磨石の特徴も持っている。47は砂岩製の敲石である。楕円形を呈し、長軸上の両極を用いて敲打を行っている。

石斧 48～52は石斧である。48は砂岩製の局部磨製石斧で、表裏両面で自然面を大きく残している。左側縁に調整剥離を施し、右側縁は自然面をそのまま残している。刃部のみを研磨している。49は頁岩製の打製石斧である。扁平な円礫を素材としている。表面は刃部を中心に剥離を施し、裏面は自然面をそのまま利用している。50は砂岩製の打製石斧である。破損した基部をスクレイパーに転用している可能性がある。51は頁岩製の打製石斧である。左側縁は剥離を施しているのに対し、右側面は自然面をそのまま利用している。52は砂岩製の打製石斧である。層位は不明、基部のみ残存している。全面に敲打が施され、断面は扁平ではなく円形である。

石皿 53は砂岩製の石皿である。中央部がくぼみ、その周辺は摩擦により表面が滑らかなになっている。

円盤形石器 54は頁岩製の円盤形石器である。平面が円形になるように、側面全体に剥離を施している。表裏両面の中心部が赤く変色している。

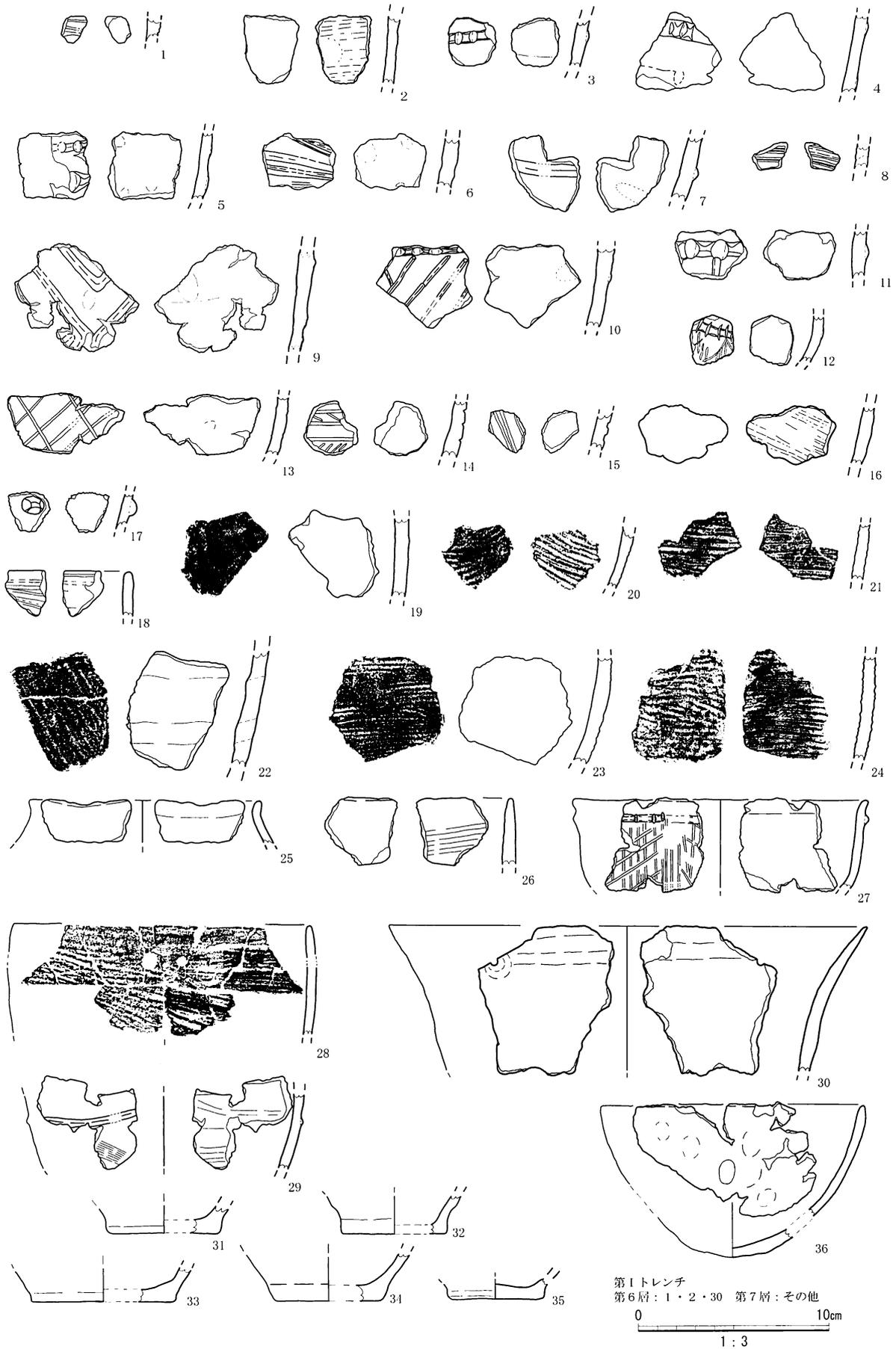
台石 55は砂岩製の台石である。大型品であり、重さは25kgを測る。摩擦により表面の大部分が滑らかなになっている。

(3) その他

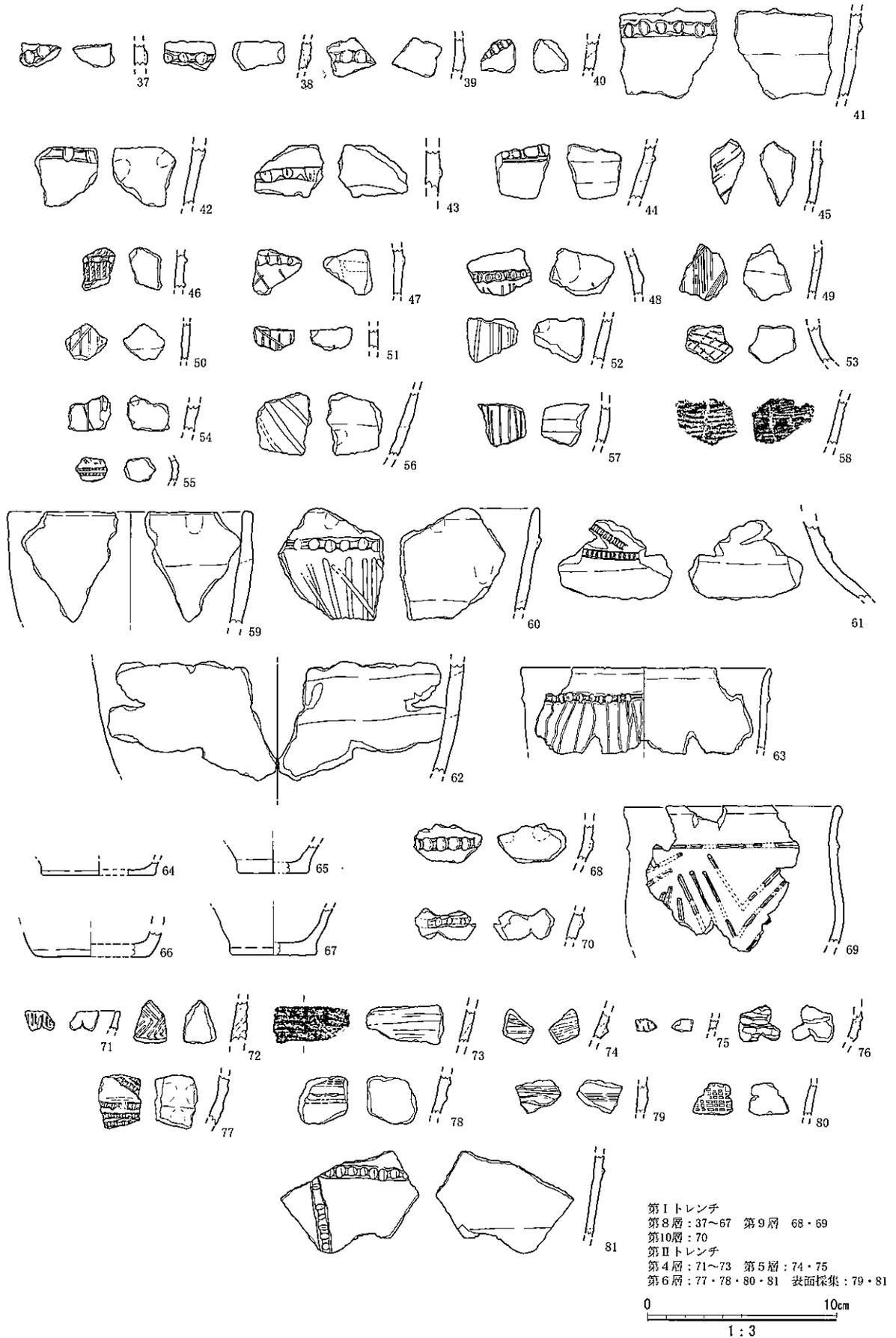
炭化物 29点出土した。なお、第Ⅱトレンチ第6層、第Ⅰトレンチ第10層出土の土器付着炭化物と第7層出土の炭化物に関して放射性炭素年代測定法(AMS法)を用いて測定した。

骨 骨片が1点検出されたが、種の同定はできなかった。

(岩熊)



第13図 A地点出土土器(1) (第Iトレンチ第6・7層)



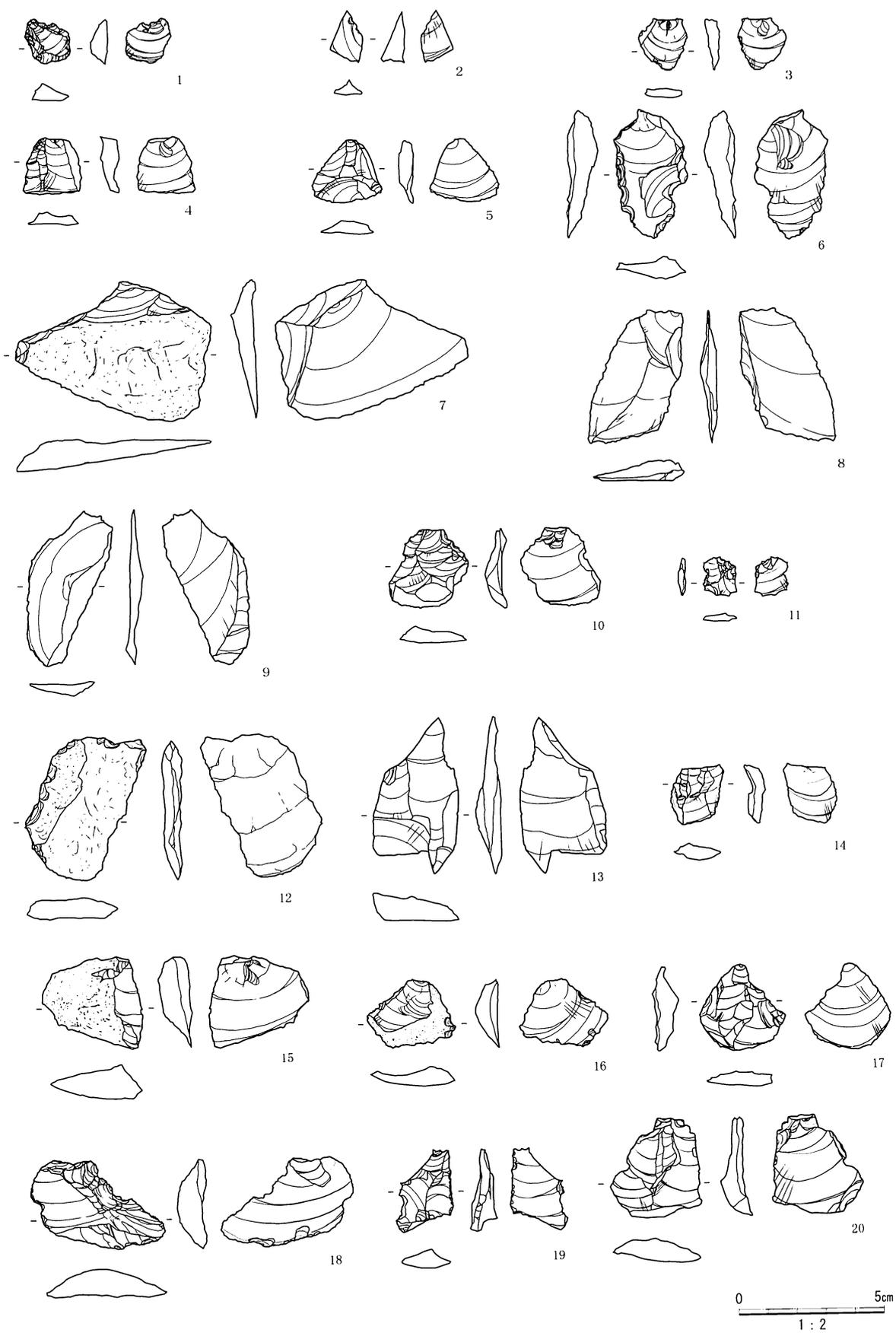
第14図 A地点出土土器(2)(第Iトレンチ第8~10層 第IIトレンチ第4~6層)

第3表 出土土器観察表 () は復元径

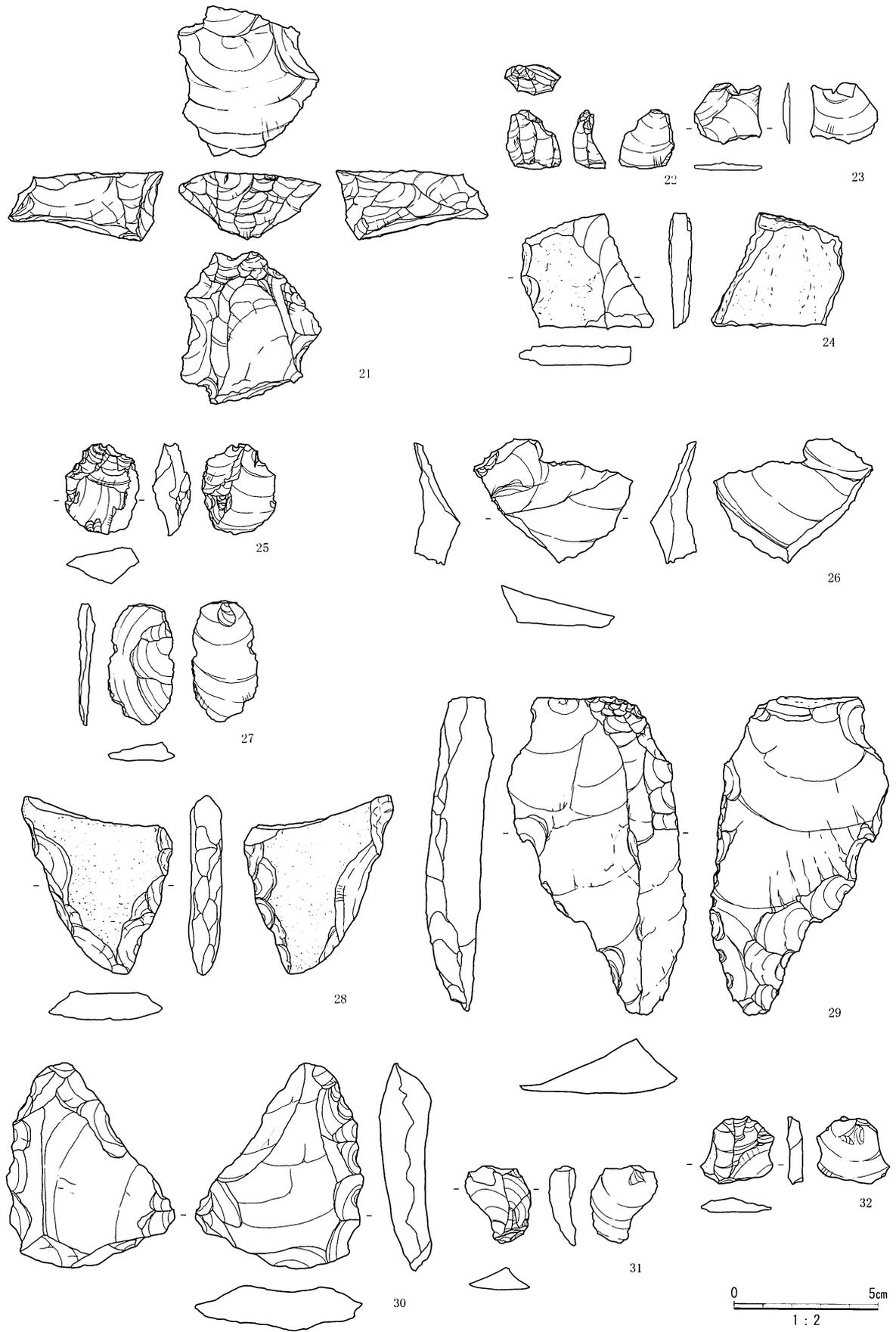
No.	器形	残存部位	法量 (cm)			文様	分類	色調	構成	胎土	調査区	層位	備考
			口径	胴部径	底径								
1	不明	胴部	-	-	-	沈線文	-	外: 明褐 (7.5YR5/6) 内: にぶい褐 (7.5YR5/4)	良好	緻密	I tr	第6層	
2	不明	胴部	-	-	-	-	-	外: にぶい黄褐 (10YR6/4) 内: 橙 (7.5YR6/6)	良好	緻密	I tr	第6層	内面に条痕
3	不明	胴部	-	-	-	陸帯文	I a	外: 明赤褐 (2.5YR5/6) 内: 橙 (5YR6/6)	良好	緻密	I tr	第7層	
4	不明	胴部	-	-	-	陸帯文	I a	外: 橙 (5YR6/6) 内: 明赤褐 (5YR5/8)	やや良好	やや粗い	I tr	第7層	
5	不明	胴部	-	-	-	陸帯文	I a	外: 明赤褐 (2.5YR5/8) 内: にぶい橙 (7.5YR6/4)	良好	密	I tr	第7層	
6	不明	胴部	-	-	-	陸起線文	I b	外: 明褐 (7.5YR5/6) 内: 橙 (7.5YR6/8)	やや良好	密	I tr	第7層	
7	不明	胴部	-	-	-	陸起線文	I b	外: にぶい赤褐 (5YR4/4) 内: 赤褐 (5YR4/8)	良好	密	I tr	第7層	
8	不明	胴部	-	-	-	-	-	外: 明赤褐 (5YR5/6) 内: にぶい赤褐 (5YR5/4)	良好	密	I tr	第7層	内外面に条痕 外面はナデ消し
9	不明	胴部	-	-	-	陸起線文	I b	外: 黄褐 (7.5YR7/8) 内: にぶい黄 (2.5YR6/3)	良好	緻密	I tr	第7層	
10	不明	胴部	-	-	-	陸帯文・陸起線文	I b	外: にぶい橙 (7.5YR5/4) 内: 明赤褐 (5YR5/8)	良好	緻密	I tr	第7層	
11	不明	胴部	-	-	-	陸帯文・沈線文	I b	外: 橙 (5YR6/6) 内: 橙 (5YR6/7)	良好	密	I tr	第7層	
12	不明	胴部	-	-	-	陸帯文・沈線文	I c	外: 褐 (7.5YR4/4) 内: 橙 (5YR6/8)	良好	緻密	I tr	第7層	
13	不明	胴部	-	-	-	沈線文	I c	外: 橙 (5YR6/6) 内: 褐 (7.5YR4/4)	良好	密	I tr	第7層	
14	不明	胴部	-	-	-	沈線文	I c	外: 黄褐 (7.5YR7/8) 内: 浅黄 (2.5YR7/3)	良好	密	I tr	第7層	
15	不明	胴部	-	-	-	沈線文	I c	外: 暗赤褐 (5YR3/5) 内: 橙 (5YR6/6)	良好	緻密	I tr	第7層	
16	不明	胴部	-	-	-	-	-	外: 橙 (5YR6/8) 内: 暗褐 (7.5YR3/3)	良好	密	I tr	第7層	内面に条痕
17	不明	胴部	-	-	-	-	-	外: 橙 (5YR6/8) 内: 黒褐 (5YR2/1)	良好	緻密	I tr	第7層	瘤状突起の貼付
18	不明	口縁部	-	-	-	-	-	外: 黒褐 (7.5YR3/1) 内: 褐 (7.5YR4/4)	良好	緻密	I tr	第7層	内外面に条痕
19	不明	胴部	-	-	-	-	-	外: 橙 (7.5YR6/8) 内: 明黄褐 (10YR6/6)	やや良好	やや粗い	I tr	第7層	内外面に条痕 内面はナデ消し
20	不明	胴部	-	-	-	-	-	外: 褐 (10YR4/4) 内: 黄褐 (10YR5/8)	良好	緻密	I tr	第7層	内外面に条痕
21	不明	胴部	-	-	-	-	-	外: 黒褐 (10YR3/1) 内: 暗赤褐 (5YR3/6)	良好	密	I tr	第7層	内外面に条痕
22	不明	胴部	-	-	-	-	-	外: 明褐 (7.5YR5/6) 暗褐 (7.5YR3/4) 内: 明赤褐 (7.5YR5/8)	良好	緻密	I tr	第7層	外面に条痕
23	不明	胴部	-	-	-	-	-	外: にぶい赤褐 (5YR5/4) 内: 橙 (5YR6/8)	良好	緻密	I tr	第7層	外面に条痕
24	不明	胴部	-	-	-	-	-	外: 明赤褐 (5YR5/6) 内: 明赤褐 (2.5YR5/8)	良好	やや密	I tr	第7層	内外面に条痕
25	鉢	口縁部	(12.6)	-	-	-	-	外: 明赤褐 (5YR5/6) 内: 明赤褐 (5YR5/7)	良好	緻密	I tr	第7層	
26	不明	口縁部	-	-	-	-	-	外: 明赤褐 (5YR5/6) 黒褐 (7.5YR3/1) 内: 明赤褐 (5YR5/6)	良好	緻密	I tr	第7層	内外面に条痕
27	浅鉢	口縁部 胴部	(16.0)	-	-	陸帯文・沈線文	I c	外: 明赤褐 (5YR5/7) 内: 明赤褐 (5YR5/8)	やや良好	やや緻密	I tr	第7層	
28	鉢	口縁部	(16.4)	-	-	-	II	外: 明褐 (5YR5/6) 内: 褐 (5YR4/6)	良好	密	I tr	第7層	内外面に条痕 補修孔あり (4mm)
29	鉢	胴部	-	(15.0)	-	陸起線文	II	外: にぶい褐 (5YR4/4) 内: 黒褐 (5YR3/1)	良好	密	I tr	第7層	内外面に条痕 28と同一個体
30	深鉢	口縁部	(25.6)	-	-	-	-	外: 浅黄 (2.5YR7/4) 暗オリブ褐 (2.5YR3/3) 内: 灰黄 (2.5YR7/2) 黒褐 (2.5YR3/1)	良好	緻密	I tr	第6層	補修孔あり
31	不明	底部	-	-	(5.8)	-	-	外: 橙 (2.5YR7/6) 内: 褐灰 (7.5YR4/1)	やや不良	緻密	I tr	第7層	
32	不明	底部	-	-	(5.6)	-	-	外: 褐 (7.5YR4/3) 内: にぶい褐 (7.5YR5/4)	良好	緻密	I tr	第7層	
33	不明	底部	-	-	(7.4)	-	-	外: にぶい褐 (7.5YR5/6) 内: 明赤褐 (5YR5/6)	やや良好	やや緻密	I tr	第7層	
34	不明	底部	-	-	(6.0)	-	-	外: 明赤褐 (5YR5/8) 内: 褐 (7.5YR4/5)	良好	密	I tr	第7層	
35	不明	底部	-	-	(5.0)	-	-	外: 橙 (7.5YR6/8) 内: 橙 (5YR6/6)	良好	密	I tr	第7層	
36	浅鉢	口縁部 胴部	(14.2)	-	-	-	-	外: 橙 (5YR6/6) 内: 橙 (5YR6/6)	良好	密	I tr	第7層	スス付着
37	不明	胴部	-	-	-	陸帯文	I a	外: 明褐 (7.5YR5/6) 内: 橙 (7.5YR6/8)	良好	密	I tr	第8層	
38	不明	胴部	-	-	-	陸帯文	I a	外: 明褐 (7.5YR5/6) 内: 橙 (7.5YR6/6)	良好	緻密	I tr	第8層	
39	不明	胴部	-	-	-	陸帯文	I a	外: 灰黄褐 (10YR4/2) 内: 明褐 (7.5YR5/6)	良好	密	I tr	第8層	
40	不明	胴部	-	-	-	陸帯文	I a	外: 明褐 (7.5YR5/6) 内: 褐 (7.5YR4/3)	やや良好	やや緻密	I tr	第8層	

二 越前遺跡A地点の調査

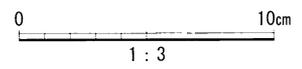
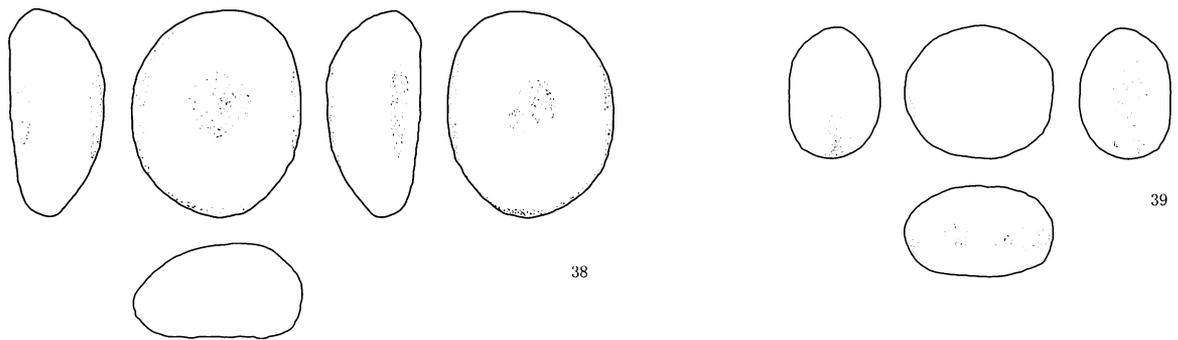
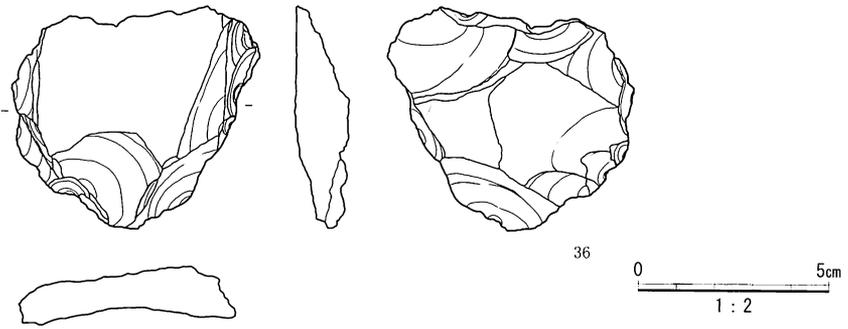
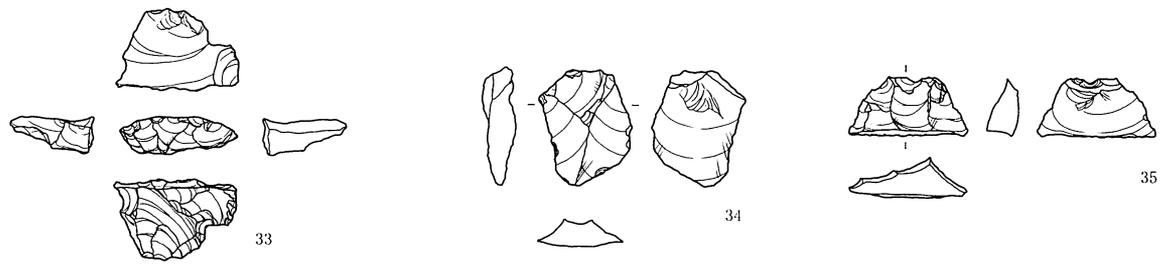
NO.	器形	残存部位	法量 (cm)			文様	分類	色調	焼成	胎土	調査区	層位	備考
			口径	胴部径	底径								
41	不明	胴部	-	-	-	降帯文	I a	外: 橙 (5YR7/6) 内: 明赤褐 (5YR5/8)	良好	密	I tr	第8層	
42	不明	胴部	-	-	-	降帯文	I a	外: 明褐 (7.5YR5/6) 内: 褐 (7.5YR4/3)	良好	密	I tr	第8層	
43	不明	胴部	-	-	-	降帯文	I a	外: 褐 (7.5YR4/6) 内: 暗褐 (7.5YR3/4)	良好	密	I tr	第8層	
44	不明	胴部	-	-	-	降起線文	I b	外: 橙 (5YR6/8) 内: 橙 (5YR6/8)	良好	密	I tr	第8層	
45	不明	胴部	-	-	-	降起線文・沈線文	I c	外: 橙 (5YR6/8) 内: 明赤褐 (5YR5/6)	良好	緻密	I tr	第8層	
46	不明	胴部	-	-	-	降帯文・押引文	I e	外: 明褐 (7.5YR5/8) 内: にぶい褐 (7.5YR5/4)	良好	密	I tr	第8層	
47	不明	胴部	-	-	-	降帯文・沈線文	I e	外: 褐 (7.5YR4/3) 内: 明赤褐 (2.5YR5/6)	良好	緻密	I tr	第8層	
48	不明	胴部	-	-	-	降帯文・沈線文	I e	外: 橙 (5YR6/6) 内: 橙 (5YR6/8)	良好	やや密	I tr	第8層	
49	不明	胴部	-	-	-	沈線文	I e	外: 橙 (5YR6/6) 内: 明赤褐 (5YR5/6)	良好	緻密	I tr	第8層	
50	不明	胴部	-	-	-	沈線文	I e	外: 褐 (7.5YR4/6) 内: 暗褐 (7.5YR3/4)	良好	密	I tr	第8層	
51	不明	胴部	-	-	-	沈線文	I e	外: 暗褐 (10YR3/4) 内: 明褐 (7.5YR5/6)	良好	密	I tr	第8層	
52	不明	胴部	-	-	-	沈線文	I e	外: 明褐 (7.5YR5/8) 内: 橙 (5YR6/6)	良好	緻密	I tr	第8層	
53	壺	頸部	-	-	-	沈線文	I e	外: 明赤褐 (5YR5/6) 内: 明赤褐 (5YR5/8)	良好	緻密	I tr	第8層	
54	不明	胴部	-	-	-	沈線文	I e	外: 明褐 (7.5YR5/6) 内: 明褐 (7.5YR5/6)	良好	密	I tr	第8層	
55	不明	胴部	-	-	-	押引文	-	外: 褐 (10YR4/4) 内: 明褐 (7.5YR5/8)	良好	緻密	I tr	第8層	
56	不明	胴部	-	-	-	沈線文	I e	外: にぶい赤褐 (2.5YR4/4) 内: 灰黄褐 (10YR6/2)	良好	やや密	I tr	第8層	
57	不明	胴部	-	-	-	沈線文	I e	外: 灰褐 (5YR4/2) 内: 橙 (5YR7/6)	良好	緻密	I tr	第8層	
58	不明	胴部	-	-	-	-	-	外: にぶい黄褐 (10YR7/4) 内: にぶい黄褐 (10YR5/3)	良好	緻密	I tr	第8層	内外面に冬痕
59	鉢	口縁部	(17.0)	-	-	-	-	外: 褐 (7.5YR4/6) 内: 褐 (7.5YR4/6)	良好	密	I tr	第8層	
60	不明	口縁部	-	-	-	降帯文・沈線文	I e	外: 明褐 (7.5YR5/6) 内: 明褐 (7.5YR5/8)	良好	緻密	I tr	第8層	
61	壺	頸部	-	-	-	降帯文	I a	外: 明褐 (7.5YR5/6) 内: 褐 (7.5YR4/4)	良好	やや緻密	I tr	第8層	
62	不明	胴部	-	(25.6)	-	-	-	外: 明褐 (7.5YR5/6) 内: 明褐 (7.5YR5/6)	良好	密	I tr	第8層	
63	深鉢	口縁部	(17.4)	-	-	降帯文・沈線文	I e	外: にぶい褐 (7.5YR5/4) 内: 明褐 (7.5YR5/6)	良好	緻密	I tr	第8層	
64	不明	底部	-	-	(7.8)	-	-	外: 褐 (10YR4/6) 内: 暗褐 (10YR3/4)	良好	緻密	I tr	第8層	
65	不明	底部	-	-	(5.8)	-	-	外: 明褐 (7.5YR5/6) 内: 明褐 (7.5YR5/6)	良好	緻密	I tr	第8層	
66	不明	底部	-	-	(7.8)	-	-	外: 明赤褐 (5YR5/6) 内: 明褐 (7.5YR5/6)	良好	密	I tr	第8層	
67	不明	底部	-	-	(5.8)	-	-	外: 橙 (2.5YR6/6) にぶい赤褐 (5YR5/4) 内: 明赤褐 (5YR5/6)	良好	密	I tr	第8層	
68	不明	胴部	-	-	-	降帯文	I a	外: 橙 (5YR6/8) 内: 灰褐 (5YR5/2)	良好	緻密	I tr	第9層	
69	不明	口縁部	(15.2)	-	-	降起線文	I b	外: 灰黄褐 (10YR4/2) 内: 褐 (7.5YR4/6)	やや良好	密	I tr	第9層	
70	不明	胴部	-	-	-	降帯文	I a	外: 橙 (5YR6/6) 灰褐 (5YR4/2) 内: 橙 (5YR6/8)	やや不良	密	I tr	第10層	
71	不明	口縁部	-	-	-	短沈線文	III	外: 明褐 (7.5YR5/6) 内: にぶい黄褐 (10YR5/4)	良好	密	I tr	第4層	
72	不明	胴部	-	-	-	短沈線文	III	外: 橙 (7.5YR6/6) 内: 橙 (7.5YR7/6)	良好	緻密	II tr	第4層	
73	不明	胴部	-	-	-	-	-	外: にぶい黄褐 (10YR5/4) 内: 橙 (7.5YR6/6)	良好	緻密	II tr	第4層	内外面に条痕
74	不明	胴部	-	-	-	降起線文	II	外: 橙 (7.5YR6/6) 内: 明褐 (7.5YR5/6)	良好	密	II tr	第5層	内面に冬痕
75	不明	胴部	-	-	-	短沈線文	III	外: 黄褐 (10YR5/6) 内: にぶい褐 (7.5YR5/4)	良好	密	II tr	第5層	
76	不明	胴部	-	-	-	降起線文	II	外: 暗灰黄 (2.5YR4/2) 内: 明褐 (7.5YR5/6)	良好	密	II tr	第6層	
77	不明	胴部	-	-	-	降帯文	III	外: 淡黄 (2.5YR8/4) 内: にぶい黄褐 (10YR7/4)	良好	密	II tr	第6層	
78	不明	胴部	-	-	-	降起線文	II	外: 暗赤褐 (5YR5/4) 内: 明赤褐 (5YR5/6)	良好	緻密	II tr	第6層	内面に冬痕ヲ消し
79	不明	胴部	-	-	-	降起線文	II	外: 橙 (5YR6/6) 内: 明赤褐 (5YR5/8)	良好	やや密	-	-	表採 内面に冬痕
80	不明	胴部	-	-	-	沈線文	-	外: 橙 (7.5YR6/6) 明褐 (7.5YR5/6) 内: 橙 (5YR6/8)	良好	密	II tr	第6層	
81	不明	胴部	-	-	-	降帯文	I a	外: 明赤褐 (5YR5/6) 内: 明赤褐 (5YR5/6)	良好	密	-	-	表採



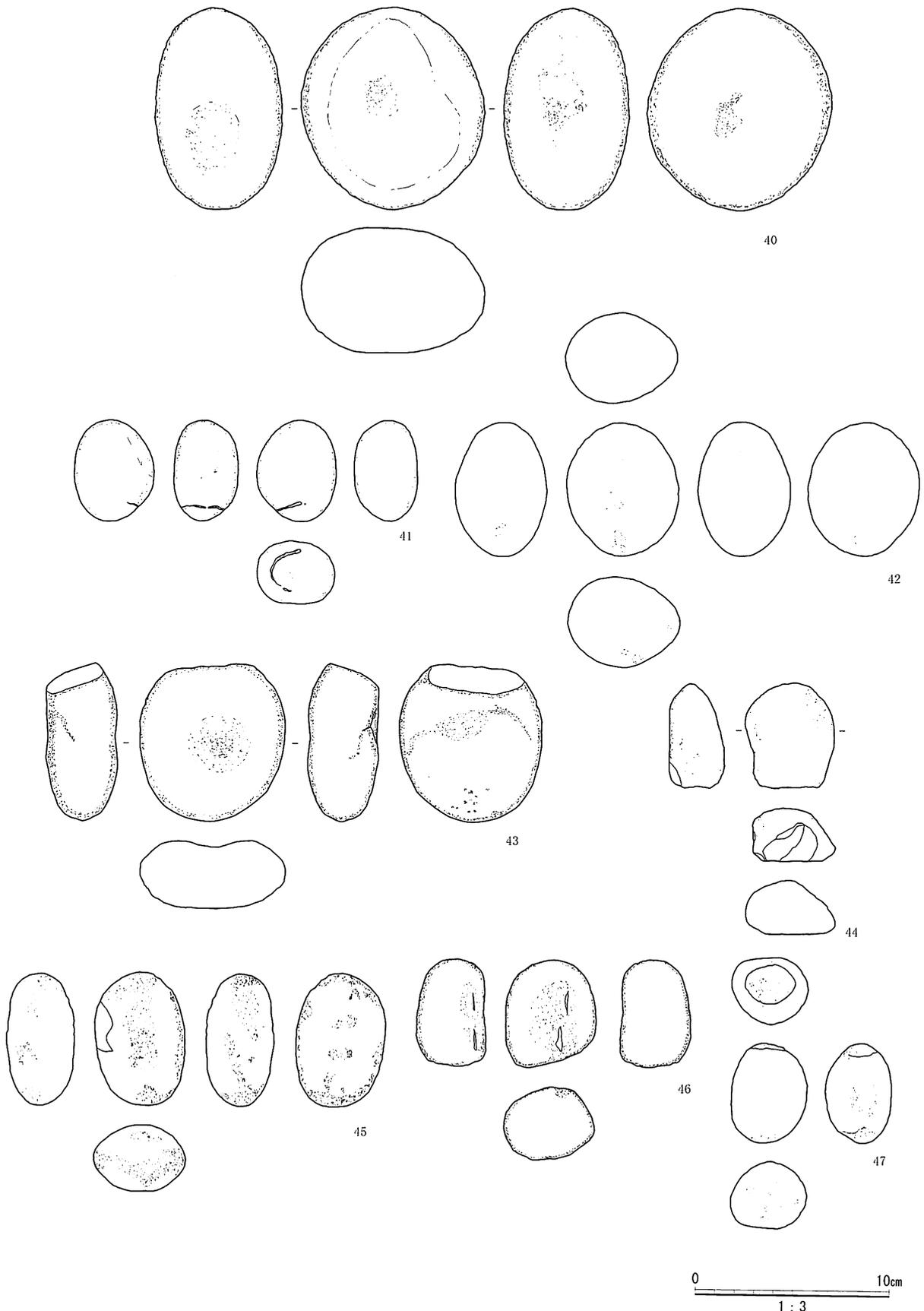
第15图 A地点出土石器(1)



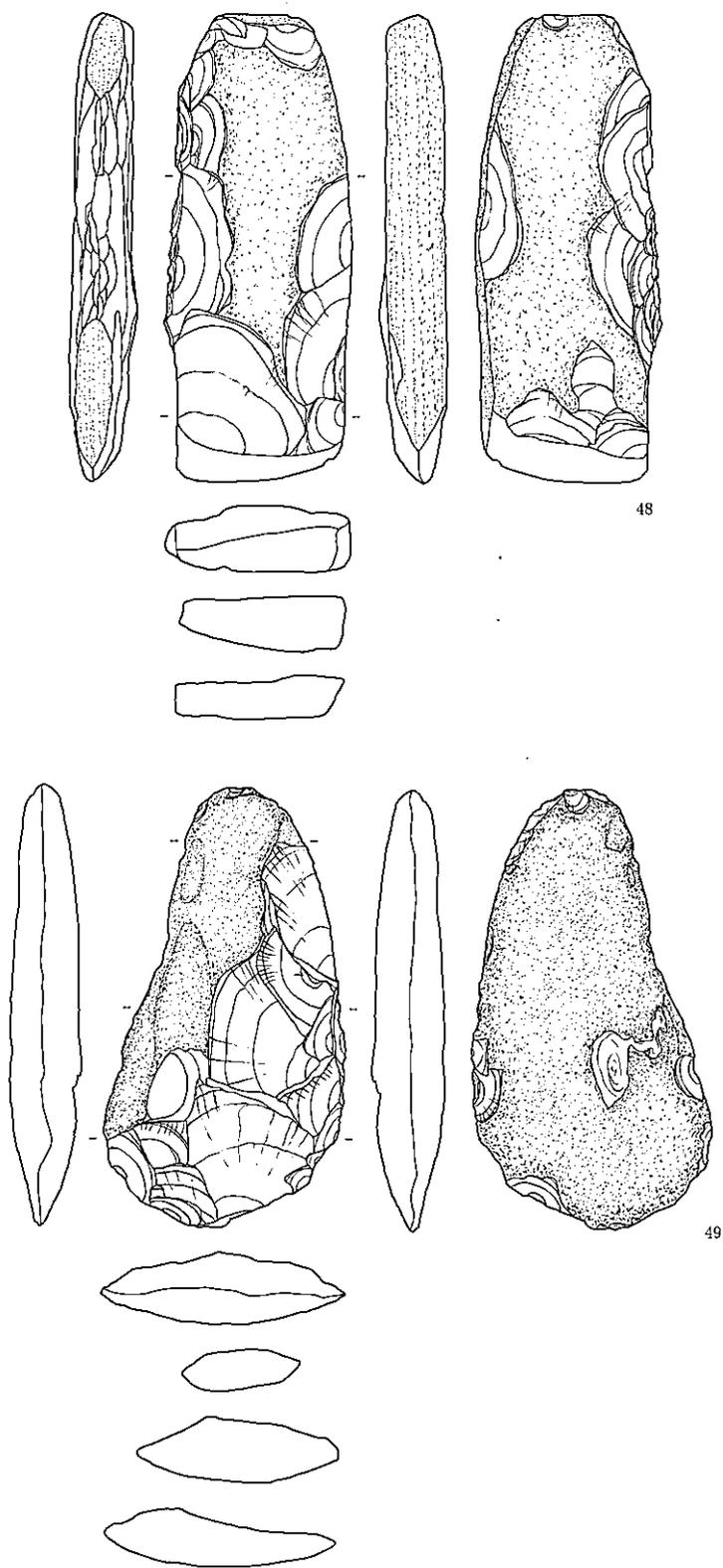
第16図 A地点出土石器(2)



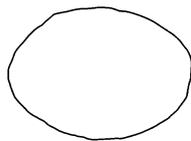
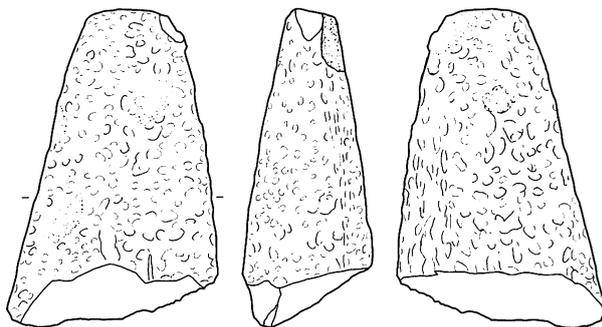
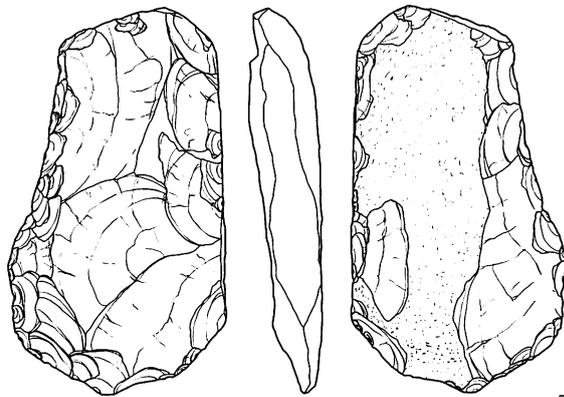
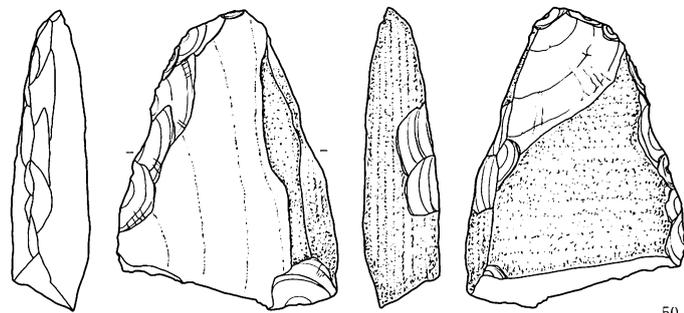
第17图 A地点出土石器(3)



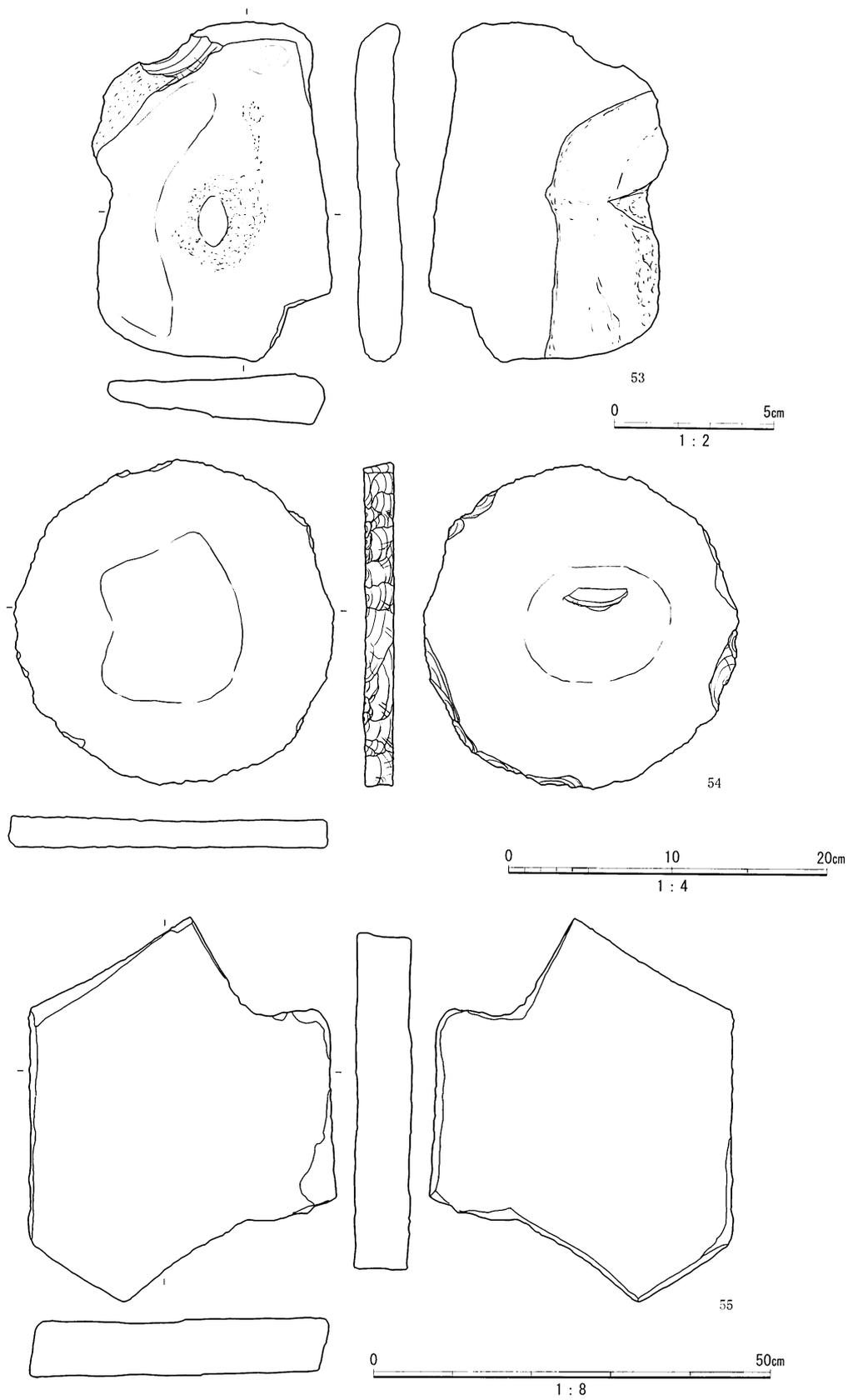
第 18 図 A 地点出土石器 (4)



第19圖 A地点出土石器(5)



第 20 図 A地点出土石器 (6)



第 21 图 A地点出土石器 (7)

第4表 出土石器観察表

No.	器種	石材	法量 (mm)			重さ (g)	調査区	層位
			長さ	幅	厚さ			
1	剥片	黒曜石	15.8	14.1	6.2	1.3	I tr	第6層
2	剥片	黒曜石	17.9	9.9	5.8	0.7	I tr	第6層
3	剥片	黒曜石	17.6	16.7	3.7	0.8	I tr	第6層
4	剥片	黒曜石	19.7	19.1	4.1	2.0	I tr	第6層
5	剥片	黒曜石	21.0	21.7	4.6	2.0	I tr	第7層
6	剥片	黒曜石	40.1	28.4	8.1	7.4	I tr	第7層
7	剥片	貞岩	43.6	65.4	9.2	23.2	I tr	第7層
8	剥片	貞岩	46.2	25.9	5.6	6.7	I tr	第7層
9	剥片	貞岩	55.4	21.2	3.7	4.2	I tr	第7層
10	剥片	黒曜石	26.6	23.3	4.6	4.3	I tr	第7層
11	剥片	黒曜石	23.3	21.1	4.8	2.7	I tr	第7層
12	剥片	貞岩	53.5	28.5	4.7	10.5	I tr	第7層
13	剥片	貞岩	46.2	29.1	6.8	10.2	I tr	第7層
14	剥片	黒曜石	19.3	16.6	4.5	1.6	I tr	第7層
15	剥片	黒曜石	32.5	34.4	9.8	9.8	I tr	第7層
16	剥片	黒曜石	22.9	28.0	6.9	3.7	I tr	第7層
17	剥片	黒曜石	26.9	26.0	5.3	3.0	I tr	第7層
18	剥片	黒曜石	25.4	48.2	7.6	9.1	I tr	第7層
19	剥片	黒曜石	23.3	18.0	8.5	3.2	I tr	第7層
20	剥片	黒曜石	22.1	22.1	4.6	2.2	I tr	第7層
21	石核	貞岩	23.4	45.2	51.1	54.5	I tr	第8層
22	石核	黒曜石	20.2	16.6	7.4	3.3	I tr	第7層
23	剥片	貞岩	33.4	31.9	3.7	5.3	I tr	第8層
24	剥片	貞岩	36.9	35.1	7.5	18.3	I tr	第8層
25	剥片	黒曜石	30.7	24.1	11.3	7.7	I tr	第8層
26	剥片	貞岩	41.8	21.7	3.5	4.4	I tr	第8層
27	剥片	貞岩	47.4	38.5	12.6	18.8	I tr	第8層
28	スクレイパー	砂岩	71.6	45.3	10.4	41.7	I tr	第8層
29	スクレイパー	貞岩	112.4	55.5	17.1	123.3	I tr	第8層
30	スクレイパー	砂岩	71.2	56.0	12.7	62.8	I tr	第8層
31	剥片	黒曜石	27.4	18.8	7.5	3.4	II tr	第4層
32	剥片	黒曜石	20.9	23.5	5.1	2.9	II tr	第5層
33	剥片	黒曜石	9.7	30.7	21.2	6.1	I tr	第6層
34	剥片	黒曜石	28.9	19.7	7.8	4.6	II tr	第4層
35	剥片	黒曜石	14.7	30.7	8.6	3.7	II tr	第4層
36	剥片	貞岩	56.0	66.5	12.6	52.2	—	表採
37	敲石	砂岩	126.6	111.0	72.6	1424.1	I tr	第7層
38	敲石	砂岩	81.8	66.6	36.5	272.8	I tr	第8層
39	敲石	砂岩	59.0	53.5	37.2	161.0	I tr	第8層
40	磨石	貞岩	107.7	95.8	67.8	962.9	I tr	第8層
41	磨石	貞岩	53.6	40.7	32.9	95.4	I tr	第8層
42	敲石	砂岩	69.2	58.3	45.9	241.7	I tr	第9層
43	敲石	砂岩	80.1	74.7	37.7	331.6	I tr	第9層
44	敲石	貞岩	55.5	46.1	27.1	95.4	I tr	第9層
45	敲石	砂岩	69.5	46.2	35.2	162.5	I tr	第9層
46	敲石	貞岩	52.9	48.3	36.5	134.3	I tr	第9層
47	敲石	砂岩	52.0	39.6	35.7	96.5	I tr	第6層
48	局部磨製石斧	砂岩	125.8	48.3	15.7	170.8	I tr	第8層
49	打製石斧	貞岩	116.3	59.0	18.4	150.8	I tr	第8層
50	打製石斧	砂岩	79.3	56.2	20.8	93.2	I tr	第8層
51	打製石斧	貞岩	103.7	58.3	17.8	138.1	—	表採
52	打製石斧	砂岩	81.6	51.8	36.7	182.4	—	層位不明
53	石皿	砂岩	108.4	72.8	15.4	159.7	I tr	第7層
54	円盤形石器	貞岩	203.0	205.0	19.0	1439.5	I tr	第8層
55	台石	砂岩	389.0	440.0	74.0	25000	I tr	第8層